



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	興部町中学校調査報告書：中学生の将来志向と地域アイデンティティ
Author(s)	浅川, 和幸
Description	平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究課題番号16K04521) 「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究報告書1 「興部町中学校調査報告書中学生の将来志向と地域アイデンティティ」 学生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。
Issue Date	2017-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90985
Type	report
File Information	06_asakawa_kaken_okoppe.pdf



平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書 1

興部町中学校調査報告書

中学生の将来志向と地域アイデンティティ

平成 29 年 3 月

研究代表者 浅川 和 幸

（北海道大学大学院教育学研究院教授）

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的
自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書 1

興部町中学校調査報告書

中学生の将来志向と地域アイデンティティ

平成 29 年 3 月

研究代表者 浅川 和 幸

（北海道大学大学院教育学研究院教授）

目次

はじめに——研究の意図と方法（浅川）	-----	1
第1章 調査結果の概要（浅川）	-----	7
第1節 中学3年生の特徴	-----	7
第2節 学校生活	-----	8
第3節 家庭における中学生	-----	14
第4節 中学生の地域アイデンティティ	-----	21
第5節 中学生の将来志向	-----	34
第2章 考察	-----	42
第1節 はじめに——考察の補助線（浅川）	-----	42
第2節 地域アイデンティティはどのような構造なのか（浅川）	-----	47
第3節 興部中学校3年生の地域アイデンティティと定住志向について(学生担当分)	-----	56
第4節 興部中学校3年生の地域アイデンティティは将来志向において どのように影響があるか（学生担当分）	-----	65
おわりに——まとめと今後の課題（浅川）	-----	72

執筆は、浅川と北海道大学教育学部学生2名で行った。それぞれの担当箇所を担当者を示した。学生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。

はじめに——研究の意図と方法（浅川）

（1）現代日本でオホーツク圏の中学生を対象とすることの意義について

この報告書では、北海道興部町の中学3年生（24人）を対象としたアンケート調査の結果を報告する。

テーマの説明に入る前に、北海道のひとつの地方の中学生を対象にした研究をすることの意味についてふれておきたい。日本において、2008年以降「人口減少」は進み始めている。しかし、若年人口（0～14歳）が不可逆に減少を始めてから、既に四半世紀たっている。例えば、1990年の北海道の中学卒業者は約9万人いた。しかし、現在のそれは4万人の半ばで、およそ二分の一になっている。そして、北海道の大学進学率は、他の都府県との比較においても、東北や九州・沖縄の諸県と並びかなり低位である。また、北海道は全国一面積の広い大きな都道府県（全国の22%）であって、この広域に都市が点在するという特徴をもつ。これらの要因は高校において、全国で最も高校の統廃合が進んでいることに顕著に現れている。そして道内に目を転ずると、札幌市とその周辺への人口の集中と地方での人口減少が同時的に進行しており、元総務大臣増田寛也が『地方消滅』（中公新書 2014年）で書いているように、北海道の市町村のほとんどは「消滅可能性都市」として名指しされている。教育関係施設でも同様である。大学はおろか専門学校もそのほとんどは、札幌市とその周辺に集中する。すなわち、高等教育を志すならば、札幌市とその周辺以外の地方出身者は、かならずと言っていいほど故郷を離れなければならないことになる。若者全体が少なくなっている。そして若者は、これまでの戦後日本において通例であった、より教育の高い段階を目指すなら、北海道であるなら札幌市とその周辺へ吸い上げられて行くのである。地方から若者を吸い上げる教育の効果は、地方の「人口減少」をより加速するものとなった。

ところで政府の「地方創生」政策群は息切れ状態にある。北海道の各地方自治体において取り組みに大きな差はあるが、教育政策も含めて動き始めている。十勝管内浦幌町の「うらほろスタイル」のような、全国的にも知られた取り組みが発信されている（『授業づくりネットワーク』No.22。特集『地域づくりと授業。』学事出版 2016年）。しかしながら、進学・就職と関係して、地方から札幌市、あるいは地方中核市へと中学生・高校生が「吸い上げ」の流れはなかなか止められないのが実情である。

「地方創生」の問題として考えるならば、産業政策も含めた定住の問題や、都市圏からの人口取り戻しの問題も考えなければならない。これについては、興部町の酪農を事例として研究の一端を報告している（浅川和幸、2016年3月、『興部町酪農調査報告書 興部町酪農の若き担い手の仕事と将来志向』、平成 25～27年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（C）（研究課題番号 30250400）「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・生徒指導の改善に関する研究」研究成果報告書1）。しかしながら、とうてい「地方創生」が含まるべき全体像まで到達しているとは言い難い。ここでは地方の中学校教育

の問題に限定して、中学生の地方からの「吸い上げ」（興部町の立場からみるなら、「吸い出され」）について検討を行う。

以上のような現状理解に立って、北海道の地方（オホーツク圏）の中学校3年生から将来志向と「地域アイデンティティ」（本報告書での意味については後述、以下では煩雑を回避するため括弧を省略する）について、中学生から教えてもらうことで、「吸い出されてゆく」流れがどのような考え方から生まれるのか、同時に中学生が住んでいる地域との関係・関わり（コミットメント）や地域アイデンティティはそのこととどのような関係をもつのかについて考えたい。

（2）本報告書における地域アイデンティティという用語の含意について

ところで、ここで用いられる地域アイデンティティという言葉について補足をしておきたい。この地域アイデンティティという言葉は、定義の定まったものではない。そのため、この報告書における「地域」（ローカル・コミュニティ）やそれと組み合わせて用いる場合の「アイデンティティ」について、補足的な説明をする。冗長なので、厳密な説明が不要な場合は、読みとばしていただいてもかまわない。

（現代もそこに含まれる）近代になって、「コミュニティ」（共同体、以下では括弧を省略する）という概念は、回顧する視点から、近代前に存在したと考えられる生産・労働・生活を共にする比較的小さな自足的単位として、発見されたものである。すなわち、発見された当初から、コミュニティは解体されて行くという展望において、近代化の敵（対象）と考えられるか、逆に行き過ぎた近代化の弊害を和らげる解毒剤として考えられてきた。

そしてコミュニティは、歴史の展開に応じて力点を変えてきたが、とりわけ今後の世界の在り方を構想する上で重要な論点となっている。

※ コミュニティに関する記述は、Z.バウマン『コミュニティ 安全と自由の戦場』（筑摩書房 2008）を参照した。

第一に、コミュニティがもつ広い意味での政治、あるいは権力の論点である。例えば、フランス共和制の伝統的な発想は、コミュニティ（中間集団）から解放された多様な諸個人が、国家に直接的に所属し、民主主義を建設するというものであった。すなわち国家とコミュニティ（中間集団）は二律背反するという考え方であった。

さらに、現在進行するグローバル化においては、この論理の延長線上に国民国家の解体さえ視野に入ってくる。ここでは、グローバル社会と国民国家が二律背反であると考えられている。個人はグローバル社会に直接所属し、（世界）市場が利害調整し、充足するというモデルである。しかしながら、このグローバル社会には世界大の国家が想定されているのではない。せいぜい市場を補完するような組織である。様々な種類の利害調整は、グローバル経済のパフォーマンスを低下させるとさえ考えられている。当然のように、激烈な格差が生み出される。そのため、個々人がグローバル社会へ解放されるように見えても、

同時に孤立の深刻化も意味し、人々の生活の不安をかき立てるしかない。だからこそ、新自由主義の最先端を走っていたアメリカ合衆国において、グローバル化によって衰退した白人中間層の安全・安心の拠り所として国民国家への揺り戻し（バックラッシュとしての「トランプ現象」）が生じた。英国の「ブレグジット」も同じ現象である。

これは新自由主義を追求する日本においても同様で、国家の役割の縮小と規制緩和による市場の力の増大は、地域格差を拡大させ、人々を孤立させている。このような状況において、基礎自治体（市町村）やより小さな単位、すなわち直接的な参加が可能な範囲で、利害対立の克服や問題解決を可能にする条件として、政治や権力を取り戻すという要求が生まれる可能性が生じている。基礎自治体の側から言えば、住民参加を勝ち取る条件が生まれる可能性が生じていると言い換えることもできる。すなわち、国民国家の解体（あるいは変容）を背景とした、コミュニティの政治や権力の回復という論点である。ただし、コミュニティ内部に政治や権力の問題が存在しないということの意味しないのは言うまでもない。このような意味で政治や権力の問題は、コミュニティの外部と内部の両方に存在するけれども、この両方が同時に再浮上する可能性が生じている。そして、「人口減少」（増田の言葉を借りると「地方消滅」）局面において、地方はこのことを奇貨としてサバイバルすべきではないかと考える。

第二に、コミュニティがもつ実体的な生活の回復という論点である。生活のあらゆる領域において市場化が進み、最後のコミュニティである家族（生活）さえ弱体化している。もはや消費の基礎的単位は、家族ではなく、個人である。この動き（「個人化」）の裏面には孤立が張りついていることは言うまでもない。孤立からくる不安を免れることができることができるのは、人生の特定の時期（若い時の一時期）のみである。孤立した生活は不安を抱えるしかない。さらに、労働と生活の両方で進行する個人化は、大多数の人々の生活の意味そのものを虚ろにしてしまう。確かに、金銭や社会関係等の資源を所有する一部の人間にとって、市場化は手に入るものの範囲を拡大し、「能力」をふるえる領域を拡大する。しかし、それほどの資源をもたない大多数の人々にとって市場化は、社会的な能力の剥奪につながる。すなわち、市場化を背景とした実体的な生活の回復という観点からコミュニティは議論の対象となる。さらに、資源をもたない人でも広範にアクセス可能な生活や人生の充実を感じる場所をどれだけ創りだせるかは、「地方創生」の核心問題である。そしてこの生活や人生の充実には、市場における消費者の役割を越える幅広い領域での参加が重要になってくる。市場における消費だけで人が生活や人生の充実を感じるができるわけではないことは、少し落ち着いて考えてみれば分かることである（「人生はお金では買えない」）。

（3）中学生の地域アイデンティティを考えることの理由について

本報告書において、中学生の地域アイデンティティを分析の対象とする理由は二つある。そして両者とも、中学生が生活する場所（地域、ローカル・コミュニティ）をどのように

捉え、どのような対象と考えるのかに関わっている。

少し抽象的なところがあるため、二つの極端な例を対比することでそれを補う。まず、住む場所が全く意味をもたない場合、首都圏のサラリーマンにとっての自宅の所在する地域は、寝に帰るだけの場所であるような場合である。次に、興部町で牧場を営む酪農家のように、場所が生活の基盤であり、意味が生まれる具体的な所である場合である。地域の意味は、両者で全く異なることは説明するまでもないだろう。地域をどのようなものとして捉えるのかは、地域生活によって決まってくる。このことを中学生について考えるわけである。

第一の理由は、地域アイデンティティを人生における地域移動と関連づける必要があるというものだ。中学生にとっては興部町とは、どのような場所であるのだろうか。家族的な背景によって様々となるだろう。例えば、保護者の就業が興部町に固有の結びつき方をしていない場合は、実家が興部町にあり、そこで子ども期を送り、そして出て行き、親が残り（里帰りの場所）、将来的には墓仕舞し縁が切れる場所、すなわちある期間滞在する場所と言えるだろう。逆に、保護者の就業が興部町に固有の結びつき方をしている場合には、極端な場合、跡を継ぐという場合もあるだろう。さらには、老後の保護者のために戻ってくる場合もある。保護者との関係が弱くても、中学生一人一人が、何かの意味を託して住み続けようとする場所になるかもしれない。まだ中学生であるため、人生における地域移動とは言っても地域移動展望となるが、それを把握する。そして、この展望はどのような進学や職業を志向するのかによって水路づけられる。この進学や職業志向には、保護者、中学校（のキャリア教育）やオホーツク西学区の高校配置や、興部町という地域のロケーション等が大きく影響する。あるいは制約を加える。

ところで日本社会は転換点を過ぎ、別の在り方へと変化を始めた。「人口減少」がもたらす変化は、そのうちでも大きなものである。基礎自治体もどのような形で営んで行けるか、大問題が突きつけられている。中学生のこれからの人生にも、実態は様々となるだろうが、意識の面でも大きな影響力をもつ。「人口減少」下の興部町で生きるという展望をどのように見出すことができるかという問もあるだろう。人生の地域移動の型も多様化する。教育や就業を通じて地方から都市へと移動するという人生、さらにそこから地方へもう一度移動する人生（Uターン人生、Jターン人生）や、都市から地方へ移動する（Iターン人生）、そして全く地域移動しない場合も視野に入ってくる。すなわち住む場所（地域）に関わるアイデンティティ（意味付けや「思い」）は、中学生が移動を考える際の、ひとつの錨（アンカー）として、個々人の地域移動の型が多様化する程度に応じて、それに意味を与えるものとして重要になってくる。中学生それぞれが人生において移動という問題への対処（自分なりの答を出すこと）を迫られる場合に、地域アイデンティティが影響を与えるのである。

そして、地域に「優秀な中学生」がいた場合に、「地域に残るのはもったいない」と保護者や教員が考え（当人も含めて）るといふ、これまでの当たり前だった処世訓も、今後ど

ここまで続けることができるのかにも影響を与える。

第二の理由は、地域における生活の在り方、そこでの自由の領域に関わるものとして地域アイデンティティを考えるとというものである。現代社会では、生活の消費化が進んでいる。そのため、中学生が生活において自由を感じる領域は、消費を中心とし、その程度は「多様な選択肢」と「自由なアクセス」がどの程度可能かに依存する。日本社会は、少なくとも理念的には、どこも同じように「郊外化」されている。観光化という観点から敢えて差別化されることで文化的歴史的な固有性もっている地域以外は、それを失い「郊外化」してきた。そのため「郊外化」の程度（「郊外化」されきった都市との違い）に応じて、中学生は自らの地域の位置・価値を把握する。例えば、最下位に位置するのは、「コンビニのない地域」である。そこから、「イオン」のあるなし等々と序列化されている。「コンビニのない地域」に住む中学生は、「コンビニのある地域」の中学生から嘲笑の対象となったり、自ら卑下したりする場合もあるだろう。慌てて付け加えるが、これは中学生に固有の地域アイデンティティがない場合である。中学生自身が、この序列化と無縁の場合もあるし、無縁でなくても地域の別の価値を知っていれば、十分相殺することができるだろう。

このような意味で、地域アイデンティティは、地域生活をどのように見ているか、具体的に言えば固有の価値の発見と関連する。そして、この固有の価値の発見がどのようになされるのか、特に地域社会自身の取り組み（価値の創出や発信）と関わるし、中学生自身が地域社会にどのように関わっているか（大げさに言えば参加）に拠る。さらに言えば、例え中学生であっても、地域の「若い担い手」として、生き生きとした参加をしているのかが、重要になっている。当然、長期的な展望としては地域内部の政治や権力の再配置の問題とも関わってくる。中学生が勉強だけすれば良い存在で、消費で生活の満足を得、地域社会と接点を持たないのであれば、そこで暮らしたとしても、地域には否定的な価値以外を持たないだろう。より消費に有利な地域への憧れを強め、いずれは出て行くことを考えるに違いない。自由になるためには、不利な地域を捨てる以外にないと考えるわけである。

いささか前置きが長くなった。報告書における調査結果は、第1章において「調査の概要」が第2章において「考察」という形で記述されている。まず、第1章を読んで、アンケート調査全体でどのようなことが分かったのかについて確認していただければと思う。そこから、アンケート調査の項目間の関係について、「仮説」を立てて行った「考察」が展開される。まだまだ「考察」は不十分なところもあるが、興味深い結果となっている。お読みいただければ幸いである。

※ 道内の高校生を対象とした研究に、梶井祥子編著『若者の「地域」志向とソーシャル・キャピタル』がある。切り口は違うが、問題関心は近いものがあると考えられる。

（４）図表における数値の記述への注記

ところで、調査結果の図表の表記の仕方について説明する。中学生数 24 人の分析である

ため、内訳の百分率 (%) を計算したが、有効数字が二桁で十分と考えたため、小数点以下は四捨五入した。そのため、内訳の合計が 100%にならないところもあるがご容赦ねがいたい。

さらに、自由記述を分析する際に、内容に含まれる幾つかの「要素」(キーワードみたいなもの。例えば、ソフトクリームや牛乳を「乳製品」としてひとまとめとし、それを要素と考える等)を分解して数(件数)を計上するやり方をしている(複数回答のように扱っているとも言える)。そのためひとりの記述も、三つの要素からなっている場合、3件として計上されている。例えば「24人で、34件」という表記があるが、このような方法を用いたためのものである。また、幾つかの要素をまとめて抽象化し「ラベル」を作成した時には、そのラベルに帰属する要素を記述した人数を計上することにしたために、要素数(件数)を単純集計したものと合わない場合がある。さらに、このラベルをまとめて「カテゴリ」を作成した場合の人数の計上も同様の方法をとったので、同様に数字が合わない場合がある。集計の方法上生じた結果ではあるが、ご了解願いたい。

なお、この論文の元になった調査は、平成 28~30 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)(研究課題番号 16K04521)「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」)を用いて行った。

第1章 中学生調査の概要（浅川）

第1章では2016年9月に行わせていただいた興部中学校3年生のアンケート調査を、調査項目と順序に沿う形で、記述して行く。ただし、単純集計には止まらない。回答の多くを自由記述でお願いしたので、様々な記述を集約する必要から、「カテゴリ」（概念）（以下、括弧を省略）や「ラベル」（同前）を作成したところもある。カテゴリとラベルは、表現上は異なる言葉の共通性に注目して、それをより一貫して説明できる形に抽象したものである。実際の自由記述では、記述そのものから取り出した要素を「要素」とし、それを一段階抽象しまとめたものをラベル、さらにもう一段階抽象を進めたものをカテゴリとした。さらに、これらの抽象を規定する構造を分析したところもある。また、ラベルとカテゴリは、第2章の考察で使用し、分析を展開する。これについては、その都度説明を加える。

第1節 中学3年生の特徴

（1）性別

調査に応じてくださった中学生は24人である。そのうち男子は16人（67%）、女子は8人（33%）である。

※ これ以降内訳(%)は、小数点以下を四捨五入して表記する。

（2）保護者の職業（主なもの）の特徴

保護者の職業は、自由記述の形で書いてもらった。中学生の書き方に揺れがあるため、以下の整理を行った。整理の考え方は、複合的である。まず、第一次産業に関わるものとそれ以外を区別した。さらに、この前者を「第一次産業自営」（酪農業を主とした畜産業、漁業を中心とした水産業）とそれに関わる「周辺職業」を区別した。次に、それ以外の職業を、地域と結びつきの強い「地場的なその他の職業」と、地域と結びつきが比較的弱い「非地場的なその他の職業」を区別した。

図表1-1 保護者の職業の特徴

	度数(人)	内訳(%)
第一次産業自営	6	25
第一次産業周辺職業	4	17
地場的なその他の職業	8	33
非地場的なその他の職業	6	25
合計	24	100

※ 共稼ぎの場合は主要だと思われるものを選択した。

この複合的な区別の結果、中学生の保護者の職業を四つに分類した。それが図表1-1である。

※ 両親の職業が記述されてある場合は、筆頭に書かれているものを主要な職業と考え、それを整理した。複数の記述があったのは5人である。内訳(%)は度数を母数(中学生数24人)で除したもの。小数点以下は四捨五入した。以下、断りのない限り同様。

中学生の保護者には、「第一次産業自営」(酪農家と漁家)が6人(25%)いた。さすがに多い。そして酪農に関わる「第一次産業周辺職業」(獣医師、削蹄師、農協、食肉加工に関わる職業)が4人(17%)であった。「地場的その他職業」(役場職員、病院、介護福祉施設や高齢者に関わる職業、スクールバスの運転手・地場の運送会社運転手)が8人(33%)であった。「非地場的その他職業」(トリマー、ホクレン、介護福祉士、森林局、郵便局)などの資格職業や広域配属が予測される職業が6人(25%)である。このように整理してみたが、「地場的その他職業」と「非地場的その他職業」の区別は、記述が詳しくないために曖昧なところを含んでいることを断っておく。以下の分析では、保護者の職業の区別を必要に応じて活用する。

(3) 居住地

中学生の居住地を、興部町の地名(秋里、旭、宇津、興部、沙留、豊丘、豊野、豊畑、北興、その他)から選択してもらった。

それによると、興部が20人、宇津と豊野がそれぞれ2人ずつであった。

第2節 学校生活

(1) 授業の評価について

普段の授業の印象について、自由回答で記述してもらった。それを内容で四つに区別したのが、図1-2である。

図1-2 授業の評価

	度数(人)	内訳(%)
肯定的評価	16	67
部分的不満	5	21
集中できない	1	4
不満	2	8
合計	24	100

「肯定的な評価」が16人(67%)と多く、「部分的不満」を書いたのが5人(21%)、授業の評価ではなく自分の集中力が問題だと考えたのが1人、そして「不満」が2人(8%)であった。

さらに評価の内容を検討してみる。重複回答となっているものは、それぞれを数え上げた。「肯定的評価」の内容では、授業の雰囲気の良いが挙げられていた。「楽しい」(9人)、

「賑やか・ワイワイ」(6人)、「面白い」(6人)である。それ以外は数が少ないので省略する。この高い評価がどのような質のものであるかは、重要な論点を含んでいる。学びへの入り口として中学生を「誘う」性格のものであるのか、それともつらさを緩和するための「享楽」のようなものであるのか。さらに、内容に関する評価を含んだものとしては、「わかりやすい」(2人)、楽しいことの根拠に「意見を共有できる」こと(1人)や自分の「興味のあることを学べる」を挙げたもの(1人)がいた。総じて高い評価とすることができる。

「部分的不満」の内容には、教科によっては面白くない、「静かで面白くない」等の教科による違いを挙げたのが、合わせて3人あった。さらに、授業の仕方として、「周りとの交流する機会がもっとあれば良い」、「ノートを書いて聞くだけ」が挙がっていた。この「周りとの交流する機会がもっとあれば良い」は積極的な意見であろう。肯定的評価の中にも同趣旨の「意見を共有できる」を挙げたものがあった。さらに、「ノートを書いて聞くだけ」が否定的であったことを考えるなら、次期の学習指導要領で説かれているような、「主体的・対話的で深い学び」を望む中学生も確かにいた。

自分の側の問題を挙げたものが1人(「面白い発言に気を取られる」)いた。

明確な「不満」を挙げたのは2人であった。「パツとしない」、「面白くない、つまらない」であった。

(2) 好きな科目と嫌いな科目について

好きな科目と嫌いな科目を自由記述で書いてもらい、それを整理した結果である。科目のひとつひとつを挙げ、それへの評価を聞いた方法をとっていない。そのために、挙げられた数は少なくなっている。逆に言うと、中学生の中ではっきりとした「好き」「嫌い」が表現されていると考えられる。

図表1-3 「好きな科目」と「嫌いな科目」

	好き		どちらでもない		嫌い	
	度数(人)	内訳(%)	度数(人)	内訳(%)	度数(人)	内訳(%)
国語	2	8	14	58	8	33
数学	2	8	15	63	7	29
理科	1	4	18	75	5	21
社会	3	13	17	71	4	17
英語	4	17	13	54	7	29
音楽	2	8	19	79	3	13
美術	3	13	16	67	5	21
保健体育	11	46	10	42	3	13
技術家庭	3	13	20	83	1	4
書道	0	0	22	92	2	8
道徳	1	4	22	92	1	4
特別な活動	2	8	21	88	1	4
生徒数母数	24	100	24	100	24	100

※ 好きな教科と嫌いな教科をクロスした表を加工した。

全体として、「好き」に傾くのは体育だけである（11人、46%が「好き」）。それ以外は、「どちらでもない」に集中する。「どちらでもない」が相対的に少ないのが英語、国語、数学、美術、社会、理科といったところであるが、このどれもが「嫌い」が「好き」を上回る。主要語教科が全て含まれる。「嫌い」の最多は、国語（8人、33%）で、数学・英語（7人、29%）が続く。聞き方の問題もあると考えるが、授業の評価が高かったことを考え合わせると、科目自体には好印象をもっているわけではないが、授業中は楽しくやっているということであろうか。先生方の努力があると考えられる。

（3）学校生活の中心とその理由

学校生活で中心に置いていることを「勉強」、「友人関係」、「部活」の三つの選択肢で聞いた。またその理由について自由回答で記述してもらった。それをまとめたものが図表1-4である。また内容を幾つかに区分し（小区分）、名称を付してみた。

図表1-4 学校生活で中心に置いていることとその理由

大区分	小区分	理由
勉強中心 (n=5)	受験	受験が近いから。
		受験生なので。
		受験があるから。
		受験生になるから。
		受験も近づいているし、友人関係も大事だけど今は勉強だと思うから。
友人関係 中心(n=14)	楽しい	友達と一緒にだと楽しいから。
		一緒にいて楽しいから。
		友達という時が学校で、一番楽しいから。
		楽しいから。
		一番楽しくて、一番必要だと思うから。
	友達と会って話したりするのが楽しいから。	
	協力・大事	人は支え合わないと、うまく、生きていけないと思うので、協力して生活するようにしている。
		友達は大事です。いざという時に頼れます。いい関係を築いていきたいです。
		行事等で、とても力になってくれるから。
		大事にしてるから。
	その他	大人になっても大事だから。
3つの中でどれもあてはまらないと思ったが一番当てはまると思ったのは友人関係だから。		
N.A.		
部活中心(n=5)	その他	N.A.
		N.A.
		N.A.
		N.A.

「勉強中心」を選択したのは5人（21%）であった。理由は「受験」を挙げている。この調査を行わせていただいたのが9月の中旬であったから、部活動の引退も含めて、そろそろ受験に力を入れだす頃であったと思う。また、他の理由（例えば、「学ぶことそれ自身」

の魅力みたいなもの) がひとつも挙がらないことも特徴と言える。

「友人関係中心」を選択したのは14人(58%)である。理由は「楽しい」に関わるものを挙げたのが6人(25%)、「協力・大事」を挙げたのが5人(21%)である。この二つは、友人に対する考え方の違いを象徴していると考えられる。友人の意味を自分の感情に引きつけて理解すると「楽しい」になり、両者の関係の規範や意味に引きつけて理解すると「協力・大事」(支え合う、頼れる、いい関係、大人になっても大事)となってくる。中学校時代の友人を、どのような時間的な展望の下に理解するのかという違いでもある。より長期的なのが「協力・大事」であるのは言うまでもない。

「部活中心」を選択したのは5人(21%)である。引退する時期を過ぎた生徒もあるために、少ないのかもしれない。理由は雑多である。

このように、中学生は「友人関係中心」の学校生活を送っている。質的には二つの異なる理解があった。そして、受験への意識が顔をもたげてきている。

これ以降では、この学校生活で中心に置いていることを「学校生活類型」と呼称し、三つの類型(「勉強中心型」、「友人関係中心型」、「部活中心型」)を利用し分析する。また、人数の多い「友人関係中心型」は、必要に応じてさらに「楽しい」、「協力・大事」、「その他」という小分類も活用する。

(4) 学校生活で中心に置いていることと性別

この学校生活類型は、中学生の性別と関係しているのだろうか。それをみたものが図表1-5である。

図表 1-5 学校生活類型(小分類)と性別

		男子	女子	合計	
勉強中心型	受験	度数(人)	2	3	5
		内訳(%)	40	60	100
友人関係中心型	楽しい	度数(人)	6	0	6
		内訳(%)	100	0	100
	協力・大事	度数(人)	4	1	5
		内訳(%)	80	20	100
	その他	度数(人)	1	2	3
		内訳(%)	33	67	100
部活中心型		度数(人)	3	2	5
		内訳(%)	60	40	100
合計		度数(人)	16	8	24
		内訳(%)	67	33	100

学校生活類型には、性別が大きく関わっていることが分かる。性別構成には女子が少ないという特徴があったが、その少ない女子が過半を占めるのは、「勉強中心」型と、「友人関係中心」型の「その他」だけである。男子は「友人関係中心」型の「楽しい」は全員(6

人)、「協力・大事」でも8割(4人)となる。「部活中心」型ではほぼ平均的になる。

すなわち、男子は「友人関係中心」型に大きく振れ、女子はほぼ三つの型に分散するが、「楽しい」はない。後述するが、男子が「友人関係中心」型に傾くこと、これが大きな特徴である。

また、女子が「勉強中心」型に多いという点は興味深い。一般的に高学歴への動機付けは保護者も含めて男子に高いものと考えられる。しかし地方の場合、高学歴への動機付けは一般的に低下する(高学歴への動機付けの資源や方法の点で地域格差がある)が、女子の場合安定的な雇用を考える際に資格取得(女性に典型的な専門職であるとみなされる医療・福祉系職業)の重要性は根強いものがある。このことが保護者経由で、また女子中学生でさえ自らのキャリアを進学に賭ける志向として現れている可能性がある。

(5) 学校生活類型と部活

中学生は、多くが部活に参加していた。不参加は3人(13%)に止まる。部活所属を学校生活類型とクロスしたのが図表1-6である。

図1-6 部活所属状況と学校生活で中心に置いていること(小分類)

	勉強中心型	友人関係中心型			部活中心型	計
	受験	楽しい	協力・大事	その他		
吹奏楽部	1	1	3	1	1	7
バドミントン部	0	2	1	1	1	5
野球部	1	1	1	0	1	4
バレー部	1	0	0	0	1	2
卓球部	1	1	0	0	0	2
サッカー部	0	0	0	0	1	1
未加入	1	1	0	1	0	3
合計	5	6	5	3	5	24

最も多くの中学生が所属していたのは、吹奏楽部であった。そして、バドミントン部、野球部と続く。そしてここで興味深いのは、学校生活で中心に置いていることの中での「友人関係中心」型の中学生において、その意味がある部活で異なっていることである。吹奏楽部は、他と異なると考えられる。部活の具体的な内容については分からない。しかし、「協力・大事」を強く意識している点に特徴がある。「楽しい」時間が過ごせば良いということを超えた関係が、形成されたのではないかと推測される。それ以外では、綺麗に分散していた。

(6) 学校生活類型と「やりきったこと」「やり残したこと」

中学校3年間で「やりきったこと」と「やり残したこと」を自由回答で記述してもらった。ここでも学校生活類型を用いて分類した。それが次頁の図表1-7である。

図表 1-7 学校生活類型と「やりきったこと」「やり残したこと」

大区分	小区分	やりきったこと	やり残したこと
勉強中心型 (n=5)	受験	後輩などとの交流	勉強
		勉強	先輩後輩との交流が少なかったこと
		行事、部活	なし
		部活、運動会	特になし
		部活、色々な作業	N.A.
友人関係中心型 (n=14)	楽しい	運動会のリーダー	合唱のパートリーダーとか
		運動会の団長	恋愛
		部活動	他学年との交流
		部活動	勉強、青春
		特になし	特になし
		特になし	特になし
	協力・大事	さまざまな行事を成功したこと	吹奏楽部で先輩に教えること
		学校祭でのピアノ伴奏	卒業式でのピアノ伴奏
		修学旅行	思い出作り
		部活動	1年生からの全科目における基本
	その他	部活動	いまのところない
		運動会	特になし
		部活	特になし
		特になし	分からない
部活中心型(n=5)		全校生徒と話すことができた	中学生らしいことをしてない
		中学校最後のコンクール	特になし
		部活	ない
		なんだろう	部活
		N.A.	N.A.

全体として、「やりきったこと」に具体的な内容を記述した中学生は多い(19人、79%)。しかし、「特になし」等も5人いる。総じて、満足の行く中学校生活であったと言ってよい。また、「やり残したこと」を挙げた中学生は半数になる(12人、50%)。調査時期(9月)から言っても、中学生生活の終わりを感じているということであろう。さらに細かく分析してみよう。

「勉強中心」型の中学生は、1人(「勉強」を挙げている)を除き、「やりきったこと」として部活動や行事等を挙げている。だからこそ、「やり残したこと」としての悔いが少ない。先の1人が悔いている(「先輩後輩との交流が少なかった」)だけである。受験への切り替えが完了しているとも言える。そのため「やり残したこと」で勉強を挙げたのが1人だけとなっている。

「友人関係中心」型の中学生も、「やりきったこと」が様々挙げられている一方で、「特になし」も挙げられている点に特徴がある。

小区分「楽しい」では、「やりきったこと」自体と「楽しい」が結び付いていること、さらに「やり残したこと」に、人との交流(「恋愛」、「交流」、「青春」)が挙げられている。他方で、「特になし」の場合は、友人関係に重点を置いているからこそ、部活や行事への深入りもなく、それが「やり残したこと」でも「特になし」につながっているのではないだ

ろうか。

小区分「協力・大事」の場合は、「やりきった」充実した中学校生活と共に「やり残した」具体的なことが多く挙げられている。

「その他」では、それがなくなる。小区分「楽しい」の「特になし」に近い。

「部活中心」型の中学生は、「やりきったこと」に「部活」を挙げた中学生は1人だけである。この気分は、「なんだろう」と自問する中学生に共通すると考えられる。このような意味で、「勉強中心」や「友人関係中心」を選択した中学生の、部活動を「やりきった」という満足感とは異なる。だからこそ、「やり残したこと」に部活も挙がるし、何かを犠牲にしたことをうかがわせる「中学生らしいことをしていない」が挙がるのではないだろうか。

以上のように、学校生活類型と中学校生活自体の充実の問題は関わっていた。三つの型があると考えられる。

第一に、特に「やりきったこと」もなく、特に「やり残したこと」もないタイプである。

そして、充実した中学校生活を送った中学生は二つの型に分かれる。

第二に、「勉強中心」型の中学生に典型的に見られるような、「やりきったこと」を挙げ、「やり残したこと」がない型である。後悔無く受験に向けて切り換えた型と言える。

第三に、「やりきったこと」を挙げ、同時に「やり残したこと」もある型である。「友人関係中心」型の小区分「楽しい」と「協力・大事」で差があるように思える。「やり残したこと」に、前者は抽象的な人との交流を挙げ、後者は具体的な課題を挙げている。

第3節 家庭における中学生

(1) 家庭学習の習慣

中学生の家庭学習の習慣形成はどのようになっているのだろうか。学校生活類型を用いて作成したのが図表1-8である。

図表1-8 学校生活類型と週あたり家庭学習の日数

		週あたり家庭学習の日数					合計
		毎日	4~5日	2~3日	1日	0日	
勉強中心型	度数(人)	4	0	0	1	0	5
	内訳(%)	80	0	0	20	0	100
友人関係中心型	度数(人)	5	2	3	2	2	14
	内訳(%)	36	14	21	14	14	100
部活中心型	度数(人)	1	0	1	3	0	5
	内訳(%)	20	0	20	60	0	100
合計	度数(人)	10	2	4	6	2	24
	内訳(%)	42	8	17	25	8	100

「テスト前」と「宿題」を除いた日数を選んでもらった。ただし、紋別に所在する塾に

通っている場合もあると考えられるが、それについて考慮していなかったため、それも含んでいる可能性がある。厳格な意味で自発的な家庭学習の日数が回答されているのかは、多少問題を残している。

全体の約4割が「毎日」勉強している。そしてその次に多いのが、「1日」で、25%を占める。二極化していると言えるかもしれない。そして、学校生活類型との関係で見ると、その違いが大きいことが分かる。

「勉強中心」型の中学生は、「毎日」が80%である。「友人関係中心」型の中学生は、全体的に分散する形になっている。「毎日」が多いものの、次に多いのは「2～3日」である。そして「部活中心」型の中学生は、「勉強中心」型の中学生とちょうど反転する形で、「1日」が60%と多い。徐々に引退が進んで行ったにしても、意識の上での「部活中心」の生活が、家庭学習の習慣形成に影響を及ぼしているのかもしれない。

(2) 保護者からの人格期待をどのように受け取っているか

保護者からの人格期待をどのように受け取っているのかについて、自由回答で記述してもらった。図表1-9である。

図表1-9 職業分類別保護者からの人格期待の受け止め内容

職業分類	人格期待内容	度数(人)
第一次産業 業 自営	しっかりとした社会人。	1
	人の悪口を言わない、本をたくさん読む。	1
	面白い人。	1
	なし	2
	わからない	1
	N. A.	0
	小計	6
第一次産業 業 周辺 職業	はっきり話す人。もじもじしてない人。	1
	自分の考えをきちんと持ち周りに流されない人。	1
	なし	1
	わからない	1
	N. A.	0
	小計	4
地場的 その他 職業	ウソをつかず、人の事を考えられる人間。	1
	なし	6
	わからない	0
	N. A.	1
	小計	8
非地場的 その他 職業	どんな人とも仲よくしていける人。	1
	困ったら助けてあげられる優しい人。	1
	目標をもって、達成しようとする人。	1
	なし	2
	わからない	1
	N. A.	0
小計	6	
合計		24

保護者については、職業に関わる項目との関係で分析する。図表 1 - 1 で使用した四つの区別を下に、記述を整理した。

まず、保護者の人格期待そのものを中学生が自覚していないという特徴を挙げることができる（保護者がそもそも言わない場合と、言っても中学生の記憶にない場合の両方が考えられる）。回答がない N.A.（ノー・アンサー、以下省略）が 1 人、「わからない」が 3 人、これに「なし」が 11 人となっている。微妙な違いはあるが、保護者の中学生への人格期待を自覚していない中学生が 15 人（63%）と過半数を占めていた。職業分類中で最も「なし」等が多いのは、「地場的その他職業」の保護者をもつ中学生である。何かの人格期待を自覚していたのは 1 人（13%）であった。他の職業分類では、半数が挙げていたことと対比的である。ただし、どのような因果関係があるのか分からない。偶然かもしれない。

人格期待の内容は、個人の資質に関わるものが中心となっている。「しっかりとした」、「面白い」、自分の意見をもった、「目標」をもち達成するような人格を求めている。他方で、他者との関係性についての資質を挙げたものもある。「人の悪口を言わない」、「人のことを考えられる」、「どんな人とも仲よくしていける」、「困ったら助けてあげられる」が挙がる。

憶測的ではあるが、地域において密接な生活に根拠をもつ共同性の重要性があると考え、それが中学生にも言われているかと考えたが、そうではないようだ。また、微妙な差があるが、「非地場的その他職業」の保護者 2 人が挙げているのは、地域性に依拠できないからこそ意識的に社会性を、わが子に求めている可能性もあるだろう。

（3）保護者の職業と中学生の交通圏の拡がり

保護者の職業と中学生の交通圏の拡がりの関係を、近隣都市と遠方都市へ行く頻度の質問から考えてみたい。まずは、それぞれの都市に行く頻度である。都市別に考察する。

①近隣都市へゆく頻度（紋別市と名寄市）

紋別市と名寄市は、興部町の近隣の都市である。中学生に週と月あたりで何回行くのかを質問し、記述式で回答してもらった。回答のうち「2～3 回」の様に幅のある場合は、中央値を計算し、それを分類した。ここでは 1 月あたりの回数を取り上げる。

図表 1 - 10 紋別市と名寄市に行く回数（月あたり）

		0回	1回未満	1回以上2回未満	2回以上3回未満	3回以上5回未満	5回以上	計
紋別市	度数(人)	0	0	5	6	7	6	24
	内訳(%)	0	0	21	25	29	25	100
名寄市	度数(人)	10	4	5	5	0	0	24
	内訳(%)	42	17	21	21	0	0	100

買い物や遊びで近隣都市を訪れる場合、興部町からの地理的な関係から考えると紋別市

の方が近い。それが現れる形となっている。

紋別市に行くのは、月あたり1回以上5回未満の中学生が四分之三を占める。定期的に行くと考えられる。保護者に連れられた買い物目的を中心としたルーチン的な性格をもったものと考えられる。しかし、周1回を越える、月5回以上訪れている中学生が6人(25%)もあり、保護者同伴ではなく、友人と遊びを兼ねた形で行っているのではないかと考えられる。

名寄市は、紋別市と異なり0回が4割を越える。このことから興部町は、名寄市ではなく、紋別市を向いていると考えられる。すなわち興部町は、紋別市の商圈にある。峠越えをしなければならない名寄市よりも、移動上難所のない紋別市が選択されている。またそれゆえに名寄市に行く場合は、ルーチン的な買い物とは性格の違う目的(例えば、紋別市では購入できない、ある程度専門店が必要なものの購入や遊び)をもって行く可能性もあるだろう。その意味では旭川市や紋別市とも競合関係にあると考えられそうだ。しかし、旭川市を例にとると、月あたりの訪問頻度は名寄市の半分程度である。それでも、月3回以上の中学生はいない。

②遠方都市へ行く頻度(北見市、旭川市、札幌市)

さらに北見市、旭川市、札幌市という遠方の都市について、月と年あたりで何回行くのかを質問した。幅のある場合の処理については、図1-10と同様である。

図1-11 北見市・旭川市・札幌市に行く回数(年あたり)

		0回以上2 回未満	2回以上3 回未満	3回以上4 回未満	4回以上	計
北見市	度数(人)	7	6	5	6	24
	内訳(%)	29	25	21	25	100
旭川市	度数(人)	5	11	4	4	24
	内訳(%)	21	46	17	17	100
札幌市	度数(人)	13	6	1	4	24
	内訳(%)	54	25	4	17	100

月あたりでは回数が少なすぎたため、年あたりの回数で分類した。

北見市は比較的まんべんなく来訪していると思われる。年4回以上も6人(25%)と多い。しかし、もはやほとんど来訪しない中学生も3割程度となる。

旭川市は、中学生の約半数が年に「2回以上3回未満」来訪している。3回未満では北見市を超えている。自動車で行くことを考えた場合、旭川市は北見市と遜色なく、都市規模の点ではるかに凌駕することを考えると、年中行事のように年に2・3回は旭川市に行っているという形ではないか、と考えられる。

札幌市は、ほとんど行かない生徒が半数を超える。しかし、年に4回以上来訪する生徒も少ないとは言えない。年に1回行くぐらいを基本にして、札幌市行きが幅広く浸透して

いると考えられる。実際、年に1度も札幌市を来訪しない中学生は5人に過ぎない(21%)。すなわち、中学生といえども、地域に止まっているわけではない。確かに回数は限られるが、広域の都市経験をもっている。

③中学生の交通圏の拡がり

さらに、近隣や遠方の都市に多く行く中学生の行動範囲(交通圏)を検討する。

以下のような頻度の基準を設定した。この基準は、経験的で目安的なものであり、確定的なものではないことをお断りしておく。紋別市は、興部町が商圏に所属することを考えると別格の扱いを考える必要がある。そのため、月あたり3回以上(13人)を多いと考えた。以下同様に、名寄市は月あたり1回以上(10人)、北見市と旭川市は年あたり3回以上(それぞれ11人と8人)、札幌市は年あたり2回以上(11人)を多いと判断した。そして、多く訪問する都市の重なりを図1-12に図示した。分類は、このそれぞれに該当する都市が、ひとつもない中学生、ひとつの中学生と、二つ、三つ、四つ、全部で行い、名称を書き上げると同時に、紋別市と名寄市を「近」(近隣都市の意味)、北見市と旭川市と札幌市を「遠」(遠方都市の意味)で区別し、その記述も行った。

図表1-12 都市訪問範囲の類型比較

選択類型		度数(人)	内訳(%)	
該当なし		2	8	
1都市のみ該当	紋別市のみ	2	—	
	名寄市のみ	2	—	
	小計	4	17	
2都市該当	近・近	紋別市・名寄市	2	—
		小計	2	—
	近・遠	紋別市・旭川市	1	—
		紋別市・札幌市	1	—
		名寄市・北見市	1	—
		名寄市・札幌市	1	—
	遠・遠	北見市・旭川市	1	—
		北見市・札幌市	2	—
旭川市・札幌市		1	—	
小計	10	42		
3都市該当	近・遠・遠	紋別市・北見市・旭川市	2	—
		紋別市・旭川市・札幌市	1	—
		紋別市・北見市・札幌市	1	—
	小計	4	17	
4都市以上該当	近・遠・遠・遠	紋別市・名寄市・北見市・札幌市	2	—
		名寄市・北見市・旭川市・札幌市	1	—
	全部	1	—	
	小計	4	17	
計(母数)		24	100	

※ 紋別市は月あたり3回以上、名寄市は月あたり1回以上、北見市・旭川市は年あたり3回以上、札幌市は年あたり2回以上の11人を対象とした。

第一に、該当なしの中学生が2人いる。この二人は、紋別市へ行く頻度も月0回を挙げている。

第二に、1都市のみ該当は4人である。近隣の都市のみが挙がる。内訳は、紋別市のみ該当が2人、名寄市のみ選択が2人である。

第三に、2都市該当は10人である。これが最も多い。まず、紋別市と名寄市の二つが該当するのは2人である。この近郊都市のみの該当を「近・近」と記述する（以下も同様）。「近・遠」に該当するのは4人である。内訳は、紋別市・旭川市と紋別市・札幌市、そして名寄市・北見市と名寄市・札幌市が1人ずつである。「遠・遠」に該当するのは4人である。内訳は、北見市・旭川市が1人、北見市・札幌市が2人、旭川市・札幌市が1人である。

第四に、3都市該当は4人である。全て「近・遠・遠」となり、「近」は紋別市である。これに北見市・旭川市が加わるのが2人、旭川市・札幌市が加わるのが1人、北見市・札幌市が加わるのが1人である。

第五に、4都市以上該当は4人である。五都市から旭川市を除くのが2人、紋別市を除くのが1人、全てが該当したのが1人である。

このように見ておこなうなら、2都市以上が該当し、そこに遠方の都市が含まれ、あるいは加わる形で広域化していることが分かる。0ないし1都市のみ該当は6人で25%を占める。2都市以上が該当する18人の中で、紋別市・名寄市に該当する2人を除くと、16人（67%）の中学生は、年数回は遠方の都市を訪れる。年に1回も札幌市に行かない中学生は5人しかいないことを考えても、保護者を含めて行動範囲は広い。それを見て中学生は考え、興部町についてのある評価をもつ。

④保護者の職業と中学生の交通圏の拡がり

保護者の職業と中学生の交通圏の拡がりの関連を検討する。保護者の職業は先にも使用された分類を使用する。

図表1-13 保護者の職業と交通圏の拡がり

		交通圏の拡がり				合計
		興部町完結	紋別市・名寄市まで	北見市・旭川市まで	札幌市まで	
第一次産業 自营	度数(人)	1	0	3	2	6
	内訳(%)	17	0	50	33	100
第一次産業 周辺職業	度数(人)	0	1	0	3	4
	内訳(%)	0	25	0	75	100
地場のそ 他職業	度数(人)	1	2	1	4	8
	内訳(%)	13	25	13	50	100
非地場のそ 他職業	度数(人)	0	3	1	2	6
	内訳(%)	0	50	17	33	100
合計	度数(人)	2	6	5	11	24
	内訳(%)	8	25	21	46	100

中学生の行動範囲は、遠近をより意識して前述した図表を組み換えた。興部町完結、紋別市・名寄市まで、北見市・旭川市まで、札幌市までの四つに整理し直した。

行動範囲が興部町で完結するのは2人(8%)にすぎない。紋別市と名寄市までに6人(25%)分が加わり、北見市と旭川市までに5人(21%)が加わる。そして、およそ半分の中学生が札幌市を交通圏の拡がりの中に納めている。

そしてこの交通圏の拡がり、保護者の職業と関係が深いことも分かった。「第一次産業自営」は北見市と旭川市まで三分の二となる。札幌市までは少ない。「第一次産業周辺職業」は行動範囲が広域である。札幌市までとなるのが四分之三である。最も行動範囲が広い。次に行動範囲が広いと思われるのは「地場的その他職業」で、半数が札幌市までである。そして「非地場的その他職業」は最も狭い。紋別市と名寄市までで半数となる。ここには、保護者の職業があまり恵まれたものではないことも関わっている可能性がある。

(4) 中学生の趣味——学校生活類型による考察

学校生活類型と趣味の関係を図示したのが図表1-14である。趣味は自由回答で記述してもらったものをジャンル別で分類し、その件数を数え上げたものである。同ジャンルに複数挙がった場合は1件と数えた。また合計は延べ件数を計上し、内訳は母数で除した数字である。

図表1-14 学校生活類型と趣味

		スポーツ	ゲーム	アニメ・漫画	教養系	動画鑑賞	スポーツ観戦	その他	N.A.	合計
勉強中心型 (n=5)	度数(件)	1	1	0	3	0	0	0	1	6
	内訳(%)	20	20	0	60	0	0	0	20	120
友人関係中心型 (n=14)	度数(件)	6	7	4	5	3	2	1	0	28
	内訳(%)	43	50	29	36	21	14	7	0	200
部活中心型 (n=5)	度数(件)	2	2	1	1	0	0	1	0	7
	内訳(%)	40	40	20	20	0	0	20	0	140
合計	度数(件)	9	10	5	9	3	2	2	1	41
	内訳(%)	38	42	21	38	13	8	8	4	171

まず、学校生活類型によって趣味数が大きく異なることが興味深い。「勉強中心」型は、教養系の趣味に集中し、少ない。「友人関係中心」型は、趣味の延べ数が非常に多い。平均的にひとりが二つの趣味を挙げている。この趣味数が多いことと「友人関係中心」型(友人関係重視)の関連は幾つかの理解が可能である。友人関係を円滑にするためのメディア(ネタ)として、遊ぶ(する)時間を長く共有するため趣味化されやすい(趣味になってしまう。あるいはゲームでアイテムを入手するために時間を必要とする)こと、より広い趣味の世界に触れる経験をもつこと等が考えられる。男子が「友人関係中心」型に集中していたことと、ゲームが挙げられていることは強い関係がある。そして、これらの趣味はスマホで行われている可能性も高い。「部活中心」型も、「勉強中心」型ほどではないが、趣

味の延べ数は多くない。そして「スポーツ」「ゲーム」になっている。

男子であること、「友人関係中心」型であること、ゲームを趣味（友人関係のネタ）とすること、これらのつながりが確認できる。

第4節 中学生の地域アイデンティティ

(1) PROの評価と興部町でPRしたかったこと

興部中学校では3年生の修学旅行の際に、訪問地の札幌において興部町の観光特使としてPR活動をおこなっている（「PRO」活動）。この活動についての評価を自由回答で記述してもらった。それが図表1-15である。

図表1-15 PROについての評価

評価	内容
肯定的 評価	大変だったが、貴重な経験になったと思う。
	意外とPRがしやすかった。
	止まってくれる人が思ったより多かった。
	案外、終わってみると楽しく感じた。
	だれも声をあまりかけることができなくて、最初にPRしたのは逆に声をかけられたから。もっと積極的にすればよかったなと思った。
	前半は緊張して声をかけられなかったが後半はガンガンいけたのが良かった。
	興味をもって立ち止まってくれる人がいるし、うれしかったです。
	緊張したけどもらってくれた時はうれしかった。
	札幌の人やさしかったです。
	受け取ってもらえそうな人ともらえなさそうな人のみわけがついてきて、受け取ってもらえると嬉しかった。
	意外と興部を知っている人達が多かった。
	受け取ってくれる人が少なく、少しかなしくなりましたが、全てわたせたので良い人もいるものだと思いました。
	最初の方は、あまり声をかけにくかったが、だんだん慣れていって最後には達成感を味わえた。
	断られ、心が折れそうになったが、終わった後の達成感がすばらしかった。
大変だったけど、興部の良さを伝えられて良かった。	
その他 の感想	振られたときはショックでした。
	断られると辛かった。
	自分から声をかける事が難しく感じました。
	きんちょうしてうまくいかなかった。
	知らない人に話しかけるのはとても怖かったです。
否定的 評価	人にPRするのに時間がかかった。
	短い言葉で自分の町の事を伝えるのが難しかった。
	あまり楽しくなかった。
	疲れた。もう二度としたくない。

※ 回答は自由記述。評価は内容からこちらが判断したもの。

①全体的な評価の特徴

まず、感想の全体的な配置を検討する。そのために自由記述の内容を肯定的なもの（「肯定的評価」）、その他の感想で判別の付かないもの（「その他感想」）、そして否定的なもの（「否定的評価」）の三つに区別してみた。「肯定的評価」は15人（63%）、「その他感想」は7人

(29%)、「否定的評価」は2人(8%)となった。総じて肯定的評価である。大変だったが、「受け止められた」という感想が中心である。「その他感想」も、自分がその活動をする上での課題や、札幌の人の態度へのショックに向けられていて、肯定的でないという意味は薄い。「肯定的評価」に分類した「受け取ってくれる人が少なく、少しかなしくなりましたが、全てわたせたので良い人もいるものだなと思いました。」(下線部、引用者)のように、札幌の人といっても冷たい人だけではないということも、もう少し時間があれば、分かってきたのではないかと考える。「否定的評価」はなぜなのか、という理由についても質問する必要があったと考える。

②PR したかったことは何か

さらに、興部町でPR したかったことも自由回答で記述してもらった。これは、幾つかの内容であったが、類型化が可能であった。まず、「食べ物」を挙げた中学生が多かった(14人、58%)。内訳は、乳製品を挙げた中学生が10人(42%。ひとりのみ「ハム」を挙げた中学生もここに入れた)、特定のものを挙げなかった(「全般」という意味に理解した)中学生が4人(17%)である。次に酪農を中心とした「産業」を挙げた中学生が5人(21%)。そして「町そのものの良さ」を挙げた中学生が3人(13%)。「自然」を挙げた中学生と「建物」を挙げた中学生が1人(4%)ずつ。相手に応じて変えた中学生を「その他」として1人であった。

③評価とPR したかったことは関係しているか

PRO 活動の評価と興部町でPR したかったことをクロスした図表を作成した。図表1-16である。

図表1-16 PRO 活動の評価と興部町でPR したかったこと(母数は24人)

		乳製品	産業	食べ物全般	町の良さ	自然	建物	その他	合計
肯定的評価 (n=15)	度数(件)	7	2	3	2	1	0	1	16
	内訳(%)	47	13	20	13	7	0	7	107
その他感想 (n=7)	度数(件)	3	2	0	1	0	1	0	7
	内訳(%)	43	29	0	14	0	14	0	100
否定的評価 (n=2)	度数(件)	0	1	1	0	0	0	0	2
	内訳(%)	0	50	50	0	0	0	0	100
合計	度数(件)	10	5	4	3	1	1	1	25
	内訳(%)	42	21	17	13	4	4	4	104

「肯定的評価」と「その他感想」では、共に約半数が「乳製品」を挙げている。「肯定的評価」では「食べ物全般」、「産業」、「町の良さ」、「自然」が続く。幅広く挙がっていると言えそうだ。「その他感想」は、「肯定的評価」に比べてポイントが限定されているような印象を受ける。「否定的評価」は、最も挙げられた「乳製品」がないのが特徴と言える。

(2) 中学生は興部町をどのように見ているか

この報告書の大きな目的は、中学生の地域アイデンティティについて考察することにある。まずは、興部町のことをどのように思っているのかについて単純な評価とその理由について検討し、次に興部町の「良いところ」と「良くないところ」を挙げてもらったものを素材に、評価そのものの枠組みについて明らかにする。後述するが、中学生が興部町についてどのように考えるのかは、他の都市との評価に依存する。特に、21世紀初頭の日本社会を生きる中学生にとって、地域格差という言葉は知らなくてもこの対比の中に、自分の生活する町が置かれており、対比を通じて町の優劣を比較している。この比較の尺度を知ることが重要である。最後に、興部町をどのような活動の潜在力をもったものとして捉えているのかについて、興部町いるから「できること」「できないこと」を素材に明らかにする。中学生が興部町を消費の側面から捉えているのか、あるいはそれとは異なる「地域生活の共同の領域」をもっているのかが重要になる。後者がないと考えるなら、不便、不利な場所という評価を逃れることは難しくなってくる。

①中学生は興部町のことを全体的にどのように思っているか

図表 1-17 興部町のことをどのように思っているか

三択	理由
好き (n=12)	いなかだけれどそれなりに色々そろっているし人も良い人が多くいて、 そこそこ人気だから。
	穏やかだから
	牛乳がおいしいから
	好きだから
	自然もたくさんあるし行事もたのしいから
	自然災害が少ないから
	自然豊かで町民みんなやさしい。
	住みやすい
	人がやさしい
	人のつながりが多くいろんな人に助けられる。 生まれ育ってきた町だから
半々 (n=11)	「好き」でも「嫌い」でもないから。
	興部の友達が好きだが、町はつまらないのできらいだから。
	空気がきれいですごく落ちつける場所ではあるが、かなり不便な所でもある
	好きでも無ければ嫌いでもない
	自然が多く空気などはきれいだが、買い物などは車にのらないとできないから。
	人が少なくていいが、せまい店が少ない
	乳製品とかはおいしいけど、金銭面が充実していないから。
	普通だから
良いところもいっぱいあるけど、不便なところもあるから。	
嫌い(n=1)	N.A.
	N.A.
嫌い(n=1)	不便だから

まず、三択（「好き」「半々」「嫌い」）で興部町のことをどのように思っているのかについて聞いた。

「好き」が12人（50%）、「半々」が11人（46%）、「嫌い」が1人（4%）となった。

「好き」である理由は自然が豊かであることや、住みやすいこと、地域社会の質に関わる「人が優しい」等があがっている。「半々」では、肯定的な側面は様々なであるが、否定的な側面として「不便」を軸にわりと定型的な批判が並ぶ。「嫌い」では「不便」となる。しかし、この理由だけをとってもどのような構造の下に配置されているのかは、よく分からない。

②中学生は興部町の「良いところ」をどのように見ているか

そこで興部町の「良いところ」と「良くないところ」を自由記述で回答されたものから、補って考えてみる。図表1-18である。

図表1-18 興部町の「良いところ」（母数は24人）

興部町の良いところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみ	豊かな自然	自然、自然が多い・豊か	5	21
		空気がきれい・良い・おいしい	5	21
	美味しい食べ物	牛乳・アイス・乳製品がおいしい	5	21
		食べ物がおいしい	4	17
	広いスペース	人が少ない	2	8
	自然への好アクセス	自然に近い、海にすぐ行ける	2	8
小計			23	96
第一次産業が盛ん	盛況な酪農	酪農が盛ん	2	8
	盛況な漁業	漁業が盛ん	2	8
	小計			4
生活が穏やか	人が優しい	人・町民が優しい	5	21
		人の良い人が多い	1	4
	社会関係が良い	人のつながりが多い	1	4
		いろいろな人に助けてもらえる	1	4
	生活しやすい	平和・犯罪がない	2	8
		自然災害・地震がない	2	8
		穏やかだから	1	4
		落ちつける	1	4
		住みやすい	1	4
		それなりに色々とそろっている	1	4
小計			16	67
地域の取り組みがある	充実した教育環境	スポーツ施設がすごくある	1	4
		給食がいい	1	4
	地域社会の取り組み	行事も楽しい	1	4
小計			3	13
複数回答総計			46	192

この時、図1-17で理由に挙げたものも、この点を含んだ内容となっていたため、加えて分析した。ひとりの記述が2件の良いところであった場合、それは2件と捉える重複回答として整理してある。そのため、内訳(%)は件数を母数(24人)で除したものである。また内容はそれぞれ分類し集約したの。全体で46件の意見となった。ひとりで1.9件の「良いところ」を挙げている。

図表の、要素の部分が、自由記述で書かれた内容の最少単位(キーワードみたいなもの)に相当する。定型的な内容であったため、同種類のを合算し集約した。さらに幾つかの要素の内容を考慮し、まとめることが可能なものをラベルとしてさらに整理した。そして幾つかのラベルを、カテゴリとして大きくまとめた。このような手順は、記述内容の差に注目しているため、カテゴリとして同列に扱っているように見える場合でも、度数には大きな差がある。その点への考慮が必要だ。

ところで要素では、「自然、自然が多い・豊か」、「空気がきれい・良い・おいしい」、「牛乳・アイス・乳製品がおいしい」、そして「人・町民が優しい」を挙げた中学生が、それぞれ5人(21%)と多い。それ以外でまとめたものとしては、「食べ物がおいしい」の4人ぐらいである。そのため、さらに整理することを試みた。

例えば要素の「自然、自然が多い・豊か」、「空気がきれい・良い・おいしい」の場合、これらをまとめ「豊かな自然」(ラベル)とした。同様に、要素の「牛乳・アイス・乳製品がおいしい」と「食べ物がおいしい」をまとめ、「美味しい食べ物」とした。要素がひとつのもので、関係する質問への回答を考慮し、ラベルとしてはそのままを採用せず、名称を変更した場合もある。例えば、「人が少ない」(要素)は、否定的な意味で記述されたものではない。そのため、「面積に比べて、人が少ない」という内容として意味を補完し、前者(面積)の方に表現を移し、「広いスペース」とした。このような形で、内容の趣旨を活かすために変更を加えた場合もある。

このような整理の結果、ラベルは11項目になった。それぞれ、「豊かな自然」、「美味しい食べ物」、「広いスペース」、「自然への好アクセス」、「盛況な酪農」、「盛況な漁業」、「人が優しい」、「社会関係が良い」、「生活しやすい」、「充実した教育環境」、そして「地域社会の取り組み」の11項目である。

さらに、このラベルをさらに整理するなら、「自然のめぐみ」、「第一次産業が盛ん」、「生活が穏やか」そして「地域社会の取り組みがある」の4カテゴリに集約できるのではないかと考える。すなわち、中学生は興部町を、「自然のめぐみ」があり、「第一次産業が盛ん」で、「生活が穏やか」で「地域社会の取り組み」がある場所として捉えていると考えられる。しかし、これはカテゴリとしては、である。重点の置かれ方は、当然異なる。

中学生が挙げた件数から言えば、「自然のめぐみ」(カテゴリ)が最も多く(23人、96%)、その中でも「豊かな自然」(ラベル)、「美味しい食べ物」(ラベル)がほぼ拮抗して支持されている。そして、次に「生活が穏やか」(カテゴリ)が多い(16人、67%)。内訳としては、「人が優しい」(ラベル)にある程度の集中が見られるものの、さらに幅が広い、色々

な表現で語られるものであることが分かる。このような意味で、中学生の中でキーワード的なものが出てこない、言葉としては語られがたいものであるのだろう。そして「第一次産業が盛ん」(カテゴリ)は、キャッチーで語りやすく、PROでも宣伝されたけれど、自分に引きつけた場合、それほど重要視されていないことが分かる(4人、17%)。また、「地域社会の取り組みがある」(カテゴリ)は少ない(3人、13%)。中学生は、興部町や地域社会の取り組みについて、あまり知らない、あるいは関心がないのではないかと考えられる。

③中学生は興部町の「良くないところ」をどのように見ているか

図表 1-19 興部町の「良くないところ」(母数は 24 人)

興部町の良くないところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に 乏しい	コンビニが少ない	2	8
		店が少ない	2	8
		イオンがない	1	4
		紋別に行かないと買えないものがある	1	4
		物が入ってこない	1	4
		食べ物以外あまり売っていない	1	4
	遊ぶ場所に乏しい	遊ぶところが少ない	1	4
		大人数で楽しめる場所がない	1	4
	不便	不便	4	17
		いちいち遠出しなければならない	1	4
人がいない	人口減少・人がいない	2	8	
小計			17	71
「ワクワク」感が ない	「ワクワク」感が ない	田舎	2	8
		狭い	2	8
		情報が入ってこない	1	4
		つまらない	1	4
		特徴がない	1	4
		ポケモンがいない	1	4
小計			8	33
停滞する産業	停滞する観光業	観光業が発展しない	1	4
小計			1	4
田舎者性	低い環境意識	ゴミのポイ捨て	2	8
	排他性	町民がよそから来た人に冷たい	1	4
小計			3	13
自治体行政問題	計画性のなさ	風車が動かない	1	4
	少ない予算	金銭面が充実していない	1	4
小計			2	8
特になし			3	13
小計			3	13
複数回答総計			34	142

「良いところ」と同様に、「良くないところ」も自由記述内容の整理を行った。整理する

段階として区別した要素、ラベル、カテゴリについても同様である。図表1-19がそれである。

要素で比較的多い（まとまった）ものは、「不便」である。しかし、ラベルでみると、「物を買う場所に乏しい」が8件（33%。これは8件を母数で除した数字。以下同様）と最も多いことが分かる。ただし、要素としては、様々な内容に細分化されている。また、「字義道理」のものに、それを越えた意味付加がなされていると思われるものも含まれる。例えば、「コンビニが少ない」はそのようなものと考えられる。「イオンがない」も同趣旨であろう。町についての評価の象徴的な言い方である。例えば、北海道出身の学生が地元を、「コンビニも無い」と説明するとき、それは「田舎度」（という言葉があれば、であるが）が極端に高いという説明であり、同時に（自分では）都会に住んでいると思う学生が使用する場合はバカにするニュアンスで、（そうではない学生では）自分の地元を卑下するニュアンスをもつ。

「物を買う場所に乏しい」（ラベル）、「遊ぶ場所に乏しい」（ラベル）、「不便」（ラベル）そして「人がいない」（ラベル）を整理して、『都市』にあるはずのものが無い（カテゴリ）と整理した。これが17件（71%）で最大である。さらにこれとは相対的に別だと考えられる「田舎」、「狭い」、「情報が入ってこない」、「つながらない」、「特徴がない」、そして「ポケモンがいない」という要素を整理して、『ワクワク』感がない（ラベル）とした。またラベルとカテゴリを同じ名称とした。これが8件（33%）である。それ以外のラベルを挙げて行くと、「停滞する観光業」、「低い環境意識」、「排他性」、「計画性のなさ」そして「少ない予算」となる。どれも件数が少ない。「特になし」が3件（13%）であった。カテゴリは、それぞれ「停滞する産業」、「田舎者性」、「自治体行政問題」とした。「低い環境意識」と「排他性」のラベルを「田舎者性」（カテゴリ）にまとめたのは、一方で、守らなくても豊かな自然があることの裏返しとして「ゴミのポイ捨て」と、他方で、共同体があることの裏返しとしての「余所者への冷たさ」を、すなわち良い意味での田舎を裏返したものとして理解し、さらに「良くないところ」という否定的なものとして抽象化した。刺激的なものになったお許しいただきたい。

このような整理から、中学生は興部町の「良くないところ」を、『都市』にあるものが無い、『ワクワク』感がない、「停滞する産業」、「田舎者性」、「自治体行政問題」として捉えていることが分かる。さらに、中学生が挙げた件数から言えば、「良くないところ」は、『都市』にあるものが無いと『ワクワク』感がないに集中していると言える。すなわち、興部町に固有の「良くないところ」は少ないが、都市との対比構造のなかで、「良くないところ」として意識されていると考えられる。この興部町に固有の「良くないところ」が少ないという点は、一見すると良いようであるが、「良いところ」と同根の要因もあるかもしれない。それは、興部町や地域社会の取り組みについてあまり知らない、あるいは関心がないのではないか。そのため、都市との対比構造のみが際立つことになっているのではないだろうか。この場合の都市と言っても、消費の面から見たものに過ぎないが。

④「良いところ」と「良くないところ」の対比による考察

この興部町についての評価を対比すると何が分かるのだろうか。図表1-20は大項目とカテゴリのみに限定し、二つを対比したものである。

図表1-20 興部町の「良いところ」と「良くないところ」の対比

良いところ				良くないところ			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)	カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみ	豊かな自然	10	42	「都市」にあるはずのものが無い	物を買う場所に乏しい	8	33
	美味しい食べ物	9	38		遊ぶ場所に乏しい	2	8
	広いスペース	2	8		不便	5	21
	自然への好アクセス	2	8		人が少ない	2	8
	小計	23	96		小計	17	71
第一次産業が盛ん	盛況な酪農	2	8	「ワクワク」感がない	田舎	2	8
	盛況な漁業	2	8		狭い	2	8
	小計	4	17		情報に乏しい	1	4
					つまらない	1	4
					特徴がない	1	4
					ポケモンがいない	1	4
			小計	8	33		
生活が穏やか	人が優しい	6	25	停滞する産業	停滞する観光業	1	4
	社会関係が良い	2	8	小計	1	4	
	生活しやすい	8	33				
	小計	16	67				
地域の取り組みがある	充実した教育環境	2	8	田舎者性	低い環境意識	2	8
	地域社会の取り組み	1	4		排他性	1	4
	小計	3	13		小計	3	13
				自治体行政問題	計画性のなさ	1	4
					少ない予算	1	4
					小計	2	8
				特になし		3	13
複数回答総計		46	192	複数回答総計		34	142

ここまで説明したものは省略し、要点のみを強調する。「良いところ」と「良くないところ」は対比的に構成されていると考えられる。

第一に、「自然のめぐみ」と「『都市』にあるはずのものが無い」そして「『ワクワク』感がない」の対比である。そして、単純に数を比較すれば、「良くないところ」の方が多い。

第二に、「第一次産業が盛ん」と「停滞する産業」の対比である。これは「良いところ」の方が多い。しかし、第一の対比に比べて圧倒的に数が小さい。

第三に、「生活が穏やか」と「田舎者性」の対比である。これは「良いところ」の方がはるかに多い。

第四に、「地域社会の取り組みがある」と「自治体行政問題」の対比である。「良いところ」が多いものの、差が小さい。

これらのことから分かるのは、第一の表面的な対比を強く意識していることである。「自然のめぐみ」と『都市』にあるはずのものが無いと『ワクワク』感がないを比較し、後者の支持の方が高いのはそれを物語る。見方を代えれば、都市と異なる「鄙びた場所」として興部町を理解しているとも考えることもできる。その点で第三の対比も組み合わせられているのかもしれない。すなわち、都市と「鄙びた場所」の対比の中で、消費・遊び・「ワクワク」感と「自然のめぐみ」・「生活が穏やか」が当てはめられていると理解できる。中学生は興部町の「良いところ」と「良くないところ」を自由に挙げているとは言っても、この図式的な対比（都市と「鄙びた場所」）の中で、興部町を後者に割り当てるような、理解の枠組みに沿っていると考えることができる。ステレオタイプ（紋切り型）である。

この図式をはみ出すものは、「生活が穏やか」という評価の質と「地域社会の取り組みがある」という評価の中にある。中学生の生活が、興部町に固有の取り組みに関わることから生みだされるものであろう。しかし全体としては、地域社会が自治体と住民の努力で創りだされているということへの理解は低いのではないだろうか。そのため「良いところ」においても、他者感覚による評価、厳しく言えば「消費者目線」の評価で停まってしまう。さらにこの点については、次の項で深める。

（3）中学生の活動の場としての興部町の評価（興部町で「できること」と「できないこと」）

前項で興部町の評価がどのような枠組みになっているのかという点について明らかにしてきた。指摘したのは、図式的対比構造における他者感覚の評価（「消費者目線」）である。さらに、それは地域社会が自治体と住民の努力で創りだされていることへの理解の乏しさを背景にしているのではないかと考えた。ここでは、中学生が興部町で何ができる・何ができないと考えているのかを分析する。

①中学生は興部町で何が「できる」と考えているのか

「興部町にいるからこそできること」を自由回答で記述してもらった。それを分類・整理したものが次頁の図表1-21である。分析の仕方としては、記述内容から意味に注目し要素として取り出し、さらに要素を共通性の観点からラベルとして整理したものである。ひとりの回答に複数の記述が含まれたものは、それぞれを別に計上した。内訳は、件数を母数（24人）で除したものである。一人当たり1.3件の回答であった。

まず要素の特徴を明らかにする。何よりも多かったのが「興部町にいるからこそできること」はない（「特になし等」）である（5件、21%）。それ以外では、多い順に、「行事・イベント」（4件、17%）、「美味しい乳製品を味わう」（3件、13%）が少しまとまったものとしてある。これ以外は広く分散するが、遊びに関わること（「遊ぶ場所が多い」、「サイクリング」、「道路で遊ぶ」、「屋外での焼き肉」がそれぞれ2件。1件だと「自由な自転車運転」、「さわぐ」、「田舎っぽいことをする」）が比較的多いようだ。

図表 1-21 興部町にいるからできること(母数は 24 人)

ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
遊びの可能性	遊ぶ場所が多い	2	8
	サイクリング	2	8
	小計	4	17
自然体験	海水浴	1	4
	虫取り	1	4
	自然堪能	1	4
	小計	3	13
都市ではできないこと	道路で遊ぶ	2	8
	自由な自転車運転	1	4
	屋外での焼き肉	2	8
	さわぐ	1	4
	田舎っぽいことをする	1	4
	小計	7	29
美味しい乳製品を味わうこと		3	13
楽しい行事への参加	行事・イベント	4	17
	パンづくり	1	4
	小計	5	21
地域の人とのふれあう	挨拶	1	4
産業の創出	バイオマス	1	4
新規就農の可能性		1	4
計		25	104
特になし等		5	21
総計		30	125

これらの要素を整理してラベルが八つできた。それぞれ、「遊びの可能性」、「自然体験」、「都市ではできないこと」、「美味しい乳製品を味わうこと」、「楽しい行事への参加」、「地域の人とふれあう」、「産業の創出」、そして「新規就農の可能性」である。

ラベルとして整理したものとしては、「都市ではできないこと」が 7 件 (29%) と最も多く、「楽しい行事への参加」が 5 件 (21%)、「特になし等」が 5 件 (21%) となる。中学生にとって、「興部町でできることはこれだ」と言える象徴的な存在はないと思われる。

全体として、自分視点で楽しいと思えることがある (あるいは、する) 場所として興部町を理解している。興部町 (社会) に何ができるかという (社会的な) 発想は少ないと考えられる。このようなニュアンスをもっていたのは、「楽しい行事への参加」(ラベル) において、「消費者的に楽しむこと」を越えていることをうかがわせる記述 (「行事に参加できる」や「興部にしかできないイベント」) に溶け込んでいるかもしれない。また、「地域の人とふれあう」(ラベル) に分類したもの (具体的な記述としては「優しい、地域の方々への挨拶」ができる) は意識的な記述に思える。しかし、「新規就農の可能性」(ラベル) は、具体的な記述としては「やろうと思えば農家になれる」である。酪農家の保護者を持つこの中学生は「ネット関連やゲーム系」の職業に就きたいと考えているので、一見すると人ごとの話である。後継を巡る事情もあるかもしれない。すなわち、酪農を始める場として興部町を意識的に考える中学生はいない。

②中学生は興部町にいるから何が「できない」と考えているのか

「興部町にいるからこそできないこと」を自由回答で記述してもらった。それを分類・整理したものが図表1-22である。分析の仕方は図表1-21と同じである。一人当たり1件の回答であった。イメージのばらつきが少ないのではないかと考えられる。

図表1-22 興部町にいるからできないこと(母数は24人)

ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
都市的遊び	ゲーム・カラオケ	5	21
	出かける	1	4
	ショッピング	7	29
	小計	13	54
都会でのみ可能なこと	都会的なこと	2	8
	コミュニケーションの機会	1	4
	小計	3	13
産業の創出	大きなショッピングモールの建設	1	4
特になし等		6	25
N.A.		2	8
計		25	104

「特になし等」も6件(25%)あるが、要素で最も多いのは、「ショッピング」7件(29%)そして「ゲーム・カラオケ」が5件(21%)と続く。この「ショッピング」と「ゲーム・カラオケ」で半数を占める。「都市的なこと」の2件(8%)や「大きなショッピングモールの建設」を含めて、中学生にとって興部町にいるからこそできないことはステレオタイプである。都市との対比から構造化されている。

ラベルは三つである。それぞれ「都市的遊び」(13件、54%)、「都市でのみ可能なこと」(3件、13%)、「産業の創出」(1件、4%)である。

③興部町における可能性の枠組み

図表1-23 興部町における可能性の対比(母数は24人)

「できること」ラベル	度数(件)	内訳(%)	「できないこと」ラベル	度数(件)	内訳(%)
遊びの可能性	4	17	都市的遊び	13	54
自然体験	3	13	都会でのみ可能なこと	3	13
都市では出来ないこと	7	29	産業の創出	1	4
美味しい乳製品を味わう	3	13	特になし等	6	25
楽しい行事への参加	5	21	N.A.	2	8
地域の人とのふれあい	1	4	計	25	104
産業の創出	1	4			
新規就農可能性	1	4			
特になし等	5	21			
総計	30	125			

この二つを対比することで、中学生が興部町において考える可能性の枠組みについて明らかになる。

前項において中学生は図式的な対比（都市と「鄙びた場所」）に強く影響され、興部町を後者に割り当てるような、（ステレオタイプの）理解の枠組みに沿っていると考えることができる。ここでも同じことが確認される。中学生にとって興部町の可能性の図式は、「鄙びた場所」の両面の指摘である。「鄙びた場所」だからできる「遊びの可能性」、「自然体験」、「都市ではできないこと」、「美味しい乳製品を味わう」である（17人、71%）。そして「鄙びた場所」だからできない「都市的遊び」、「都市でのみ可能なこと」である（16人、67%）。そして先に指摘したように、この図式をはみ出すと考えられるのは、「楽しい行事への参加」と「地域の人とのふれあい」の中にある。それは中学生の生活が、興部町で行われる固有の取り組みに、自ら（消費者としてではなく）関わることから生みだされるものである。しかし全体としては、地域社会が自治体と住民の努力で創りだされているということへの理解は低い。そのため素材としての興部町というポテンシャル（潜在力）は、現実の町社会の営みに媒介されず、その町社会固有の意義として理解されることは少ない。そのため、自分が育つ、あるいは自分を育てる場所としての地域を見出すのではなく、「この場所にいるのであれば、こうするものだ」的に惰性的に適応していると言って良い。自分が関与することによって変えて行く「home（我が家）」的なものになりにくい。

（４）興部町の主要産業についての印象

このような、「home（我が家）」的な意識へのなりにくさは、興部町の北海道においても評価が高い主要産業とどのように関わっているのだろうか。

①酪農への印象

自由回答で記述してもらったものを、保護者職業別に並べ替え整理したものが後頁の図表1-24である。

他の地域との比較で恐縮であるが、筆者が行っている別のオホーツク圏の町村の中学生とのそれと比較すると圧倒的に良い点をまず指摘しておく。その中学校の生徒は、酪農について知らず、否定的な評価である。典型的なものは、「汚い」、「臭い」であり、「キツイ仕事」である。

ところで、「第一次産業自営」の保護者をもつ中学生は、実家の大変さを知っているが故に、肯定的な印象をもちがたくなっている。逆に、保護者が「第一次産業周辺職業」の場合は、否定的なものは少ないが印象には乏しい。「牛」である。保護者が「地場的その他職業」の場合は、製品「牛乳」「乳製品」の印象に流れる。製品になる前段階のイメージはもてない。保護者が「非地場的その他職業」の場合もあまり変わらない。すなわち、都市の中学生でも可能な牛乳への評価（「美味しい乳製品」の産地）を除くと、酪農業について中学生が「知っている」場合は、「大変」ということだけで、地域を支えているという責任や

やりがいには、残念ながら目がとどかない。これでは、酪農が町の主産業であっても、中学生には良い影響がない。産業としては身近に感じられていないのである。そうすると、なまじ「知っている」と思っていることの方が、問題かもしれない。また同時に、中学生がそう思うのは、「酪農には夢がある」、「地域社会を担っている」という点について知らない、あるいは知ることを越えて醍醐味を体験する機会に乏しいことを反映している。

図表 1-24 保護者の職業分類別酪農の印象

職業分類	印象
第一次産業 自営 (n=6)	とても大変、広い、大きい。
	広大な土地をもっている。
	生き物と関わる仕事だから大変。
	大変、休みがない。
	土の質が悪いからあまり向いていないと思う。
特になし。	
第一次産業 周辺職業 (n=4)	牛。
	牛が結構いる。
	牛の飼育やチーズ。
	大変。
地場的 その他職業 (n=8)	おいしい牛乳が出来る。
	おいしい牛乳をつくっている。
	牛乳がおいしい。
	牛乳がとても有名。
	興部の乳製品の支え。
	広い土地や専用機械が必要。
	大変。
毎日おいしい牛乳をとってくれる。	
非地場的 その他職業 (n=6)	バイオマスが良いと思う。
	一日中働いている。
	牛を育てている。
	牛乳が多くとれて、牛乳豆腐が食べれる。
	朝から夜まで大変そう。
濃くておいしい牛乳が作られている。	

②漁業への印象

興部町の漁業は沙留を中心とする。だから、興部中学校の生徒で漁家自営の保護者をもつのはひとりであった。このことは、中学生の関心が乏しいことにつながっているのだろうか。次頁の図表 1-25 も保護者の職業別に並べ替え整理したものである。

一見して漁業についてほとんど知らないことが分かる。そもそも、実家が漁家である中学生でさえ、「わからない」と答えている。これも、「ホタテ」等の産品として印象をもつ中学生が多いが、酪農よりも、若干多く作業の要素が挙げられていると言えそうだ。「大変だ」等の指摘は 4 件で、酪農の 6 件よりも少ない。よく知っている酪農よりも、よく知らない漁業の印象の方が良いかもしれない。共に小学校 3・4 年時の「地域学習」の記憶で答えて

いると推測する。

図表 1-25 保護者の職業分類別酪農の印象

職業分類	印象
第一次産業 業 自営 (n=6)	あまり見たことがないのでわからない。
	その年によってとれる量が減ってしまう。
	よくわからない。
	重要な産業。
	大変だが漁の時期以外は休みがある。
	朝が早い。
第一次産業 業 周辺職 業(n=4)	ホタテの捕れる量が多い。
	漁師怖い。
	魚を捕っている、縄を使う。
	大変。
地場的 その 他職業 (n=8)	おいしい海産物を作ってくれる。
	ホタテ。
	ホタテ・カニが有名。
	ホタテとカニがいっぱい。
	ホタテなどがいっぱい獲れる。
	ホタテの無料配布をたまにしてくれる。
	大変。
毎日朝早くから仕事しなくてはならない。	
非地場的 その 他職業 (n=6)	あまりわからない。
	いろいろな貝や魚を育てたり、捕まえていたりする。
	いろいろな道具を使っているすごい。
	ホタテがたくさん獲れていいと思う。
	魚が食べられる。
	冬の労働が少なそう。

前述したように、都市の中学生でも可能な食べ物としてのホタテへの評価を除くと、漁業について中学生が「知っている」のは、「大変」と作業の断片的な一部である。オホーツク海に面する漁協の営むホタテ貝桁網漁は、日本の漁業全体のなかでも「ドル箱」と言える存在であり、他からの参入障壁は漁業権との関係で高いが、安定したものであることも全く知らない。漁業が地域を支えているという責任ややりがいには、目がとどきにくい（例外は、「重要な産業」、「ホタテの無料配布をたまにしてくれる」、「いろいろな道具を使っているすごい」といったところか）。この状況では、町の主産業であっても中学生には影響がない。漁業においても「漁業には夢がある」、「地域社会を担っている」という点について知らない、あるいは知ることを超えて醍醐味を体験する機会には乏しい状況にあることの反映である。

第5節 中学生の将来志向

中学生の将来志向を、地域移動面、進路面、生活志向面の三つから考察する。

(1) 将来志向と地域移動展望

「ずっと興部町に残る」、「いったん興部町は出るが、戻ってくる」、「興部町から出て、戻ってこない」の三つから近いものをひとつ選択し、その理由を自由回答で記述してもらった。

「ずっと興部町に残る」が3人(13%)、「いったん興部町は出るが、戻ってくる」が7人(29%)、そして「興部町から出て、戻ってこない」が13人(54%)である。N.A.が1人(4%)あった。

男女で違いがあるかどうかを検討したのが、図表1-26である。

図表1-26 地域移動からみた進路(男女別)

		ずっと興部町 に残る	いったん興 部町は出る が、戻って くる	興部町から 出て戻ってこ ない	N.A.	合計
男子	度数(人)	2	5	8	1	16
	内訳(%)	13	31	50	6	100
女子	度数(人)	1	2	5	0	8
	内訳(%)	13	25	63	0	100
合計	度数(人)	3	7	13	1	24
	内訳(%)	13	29	54	4	100

男女別の違いはある。「いったん興部町は出るが、戻ってくる」は男子に少し多い。そして、「興部町から出て、戻ってこない」は女子に多く、この差に意味があると考えられる。

「女子は親元から放さない」という考え方が興部町にどれだけあるのか分からないが、女子中学生は、「戻ってこない」と考えている。

地域移動の理由について整理したのが、次頁の図表1-27である。理由の理解の補助線として、職業希望の有無を付け加えた。

「ずっと興部町に残る」という判断は、「職業希望」なしと結びつき、さらに消極的な理由と結びついている。積極的と言う可能性があるとしたら、「海がある」だけだろう。この事例は、保護者の職業が漁家というわけではなく、趣味にマリン系を挙げているわけでもないで、思い入れについては不明である。

「いったん興部町は出るが、戻ってくる」という判断の場合は少し複雑になる。まず「いったん出る」動機である。ここには、積極的なものとして、「専門学校」、「未知の土地経験」(都市が中心、働くという意味付けも加わる)、「興部町ではできないこと」(仕事)が挙げられ、消極的なものとして、「ずっといたくない」、「少しだけ」、「出てみたい」、そして「一回はでてみたい」が挙がる。そして、「戻ってくる」動機としては、「親」の存在と「地域への愛情」とも呼べるもの(「最後は興部が良い')が挙げられている。

「興部町から出て、戻ってこない」という判断の場合は、上述の「いったん興部町は出るが、戻ってくる」から「戻ってくる」ものを引いた形になっている。「出る」動機として

積極的なものは、「職業希望をかなえること」、「都市・外への憧れ」そして「興部町では実現できない夢」となる。この場合の夢も、職業に近いところにある。そして消極的なものは、ここには「何も変わらない」、「将来性がない」、「狭い」（仕事の「幅」＝選択肢と、世間の狭さ）という総じて、可能性の低さが指摘され、それが「興部ではないところ」という記述につながっている。

図表 1-27 「興部町から出る／出ない」の判断と判断の理由

興部町から出る／出ないの判断	職業希望なし／未定	判断の理由
「ずっと興部町に残る」	なし	都会が苦手だから
	なし	安全だから、海があるから
	なし	まだ決まっていないから
「いったん興部町は出るが、戻ってくる」	あり	専門学校に行って少しだけ都会で働きたい
	あり	親がいるから
	あり	興部ではできない、なれないことだから
	あり	北見に行くから
	あり	都会に出てみたいけど最後は興部が良い
	未定	ずっと興部にはいたくない
	未定	一回は興部を出て他の地域を見てみたい
「興部町から出て、戻ってこない」	あり	この町にいても何も変わらないと思うから
	あり	教師になるから
	あり	外の環境にいたい
	あり	将来性がないから
	あり	将来の夢が興部ではかなえられないことだから
	あり	転勤族のため戻ってくるかわからない
	あり	都会で働きたいから
	あり	少し大きな都市に住みたい
	あり	興部以外で仕事がしたいから
	未定	仕事の幅が狭い
	未定	都会で暮らしたい
	未定	興部ではないところで働くことを考えている
	未定	小さな狭い町なので、広い都会の町へ出ていきたい
N.A.	N.A.	非該当

複雑になっている。そのため理由に注目して整理し直す。また、ひとつの理由だが、複数の記述が連鎖したのも形式的に分解する。まず、「出ない」・「戻る」に関するものと、「出る」・「戻ってこない」に関するものを二つに大別する。次に、積極的理由と消極的理由の区別を導入する。微妙なものも含んでいるため仮説的な区別となっている。時間的順序性を無視した分析である。この結果、2×2の四つに分解した。次頁の図表 1-28 である。

「居る」（「出ない」・「戻る」）という理由は、挙げた中学生が少ないことから言っても、また内容の点でも、積極性は強くないと思われる。消極性も同様である。「最後は興部が良い」は意味が問題で留保がつくが、これ以上の記述がないため掘り下げることができない。

図表 1-28 興部町に「居る理由」と「離れる理由」

「出ない」・「戻る」理由	
積極的	消極的
安全だから、海があるから	都会が苦手だから
最後は興部が良い	まだ決まっていないから

「出る」・「戻ってこない」理由	
積極的	消極的
専門学校にゆく	仕事の幅が狭い
興部ではできない、なれないこと(仕事)だから	将来の夢が興部ではかなえられないことだから
教師になるから	興部以外で仕事がしたいから
転勤族のため戻ってくるかわからない(そのような仕事につくと理解)	少しだけ都会で働きたい
都会で働きたいから	興部ではないところで働くことを考えている
都市に出てみたい	この町にいても何も変わらないと思うから
他の地域を見てみたい	ずっと興部にはいたくない
都会で暮らしたい	一回は興部を出る
外の環境にいたい	将来性がないから
広い都会の町へ出ていきたい	小さな狭い町
少し大きな都市に住みたい	
親がいるから	

非該当
北見に行くから
N.A.

※ 文脈を補ったものには括弧を付けた。

「離れる」(「出る」・「戻ってこない」)という理由は、積極的理由の方が消極的理由よりも、多い。学校や仕事に関わるものもあるが、都会・都市・他の地域に対する憧れとでも呼ぶべきものが過半を占める。それ以外では「親」の存在である。消極的理由は、仕事や夢をかなえることができない場所として興部町は理解され、可能性の無い、否定される場所として意味付けられている。

全体としてまとめると、興部町に「居る」理由は少ない。「離れる理由」で積極的なものは、学業と仕事・夢という形をとるが、それよりも漠然として都会・都市への憧れから意味付けられ、その裏側に、興部町は可能性のない場所として否定されている。

学校においてキャリア教育は行われているが、中学生に根強くある図式は、その意味を変換し、夢をかなえることを動機として学習に向かわせる試みであるから、その惰性で夢をかなえられない場所として興部町を意識させることになっている可能性がある。

(2) 中学生の将来の定住希望

将来志向を居住地という側面から考えてみよう。「住むならこのまちが良い」、「遊ぶならこのまちが良い」という質問に、自由回答形式で記述してもらったものを、整理したのが図表 1-29 である。

図表 1-29 住むならこのまち・遊ぶならこのまち（母数は 24 人）

		興部町	紋別市	旭川市・北見市	その他道内	札幌市	道外	なし	N. A.	計
住みたいまち	度数(件)	3	0	5	1	7	2	4	3	25
	内訳(%)	13	0	21	4	29	8	17	13	104
遊びたいまち	度数(件)	1	1	5	0	11	0	3	3	24
	内訳(%)	4	4	21	0	46	0	13	13	100

「住みたいまち」は、将来志向と関わっているので、「N.A.」も多い（3人、13%）。また、住むところが職業によって他律的に決定されることを考える中学生もおり、それが「なし」（4人、17%）につながっている。それ以外では、最も多いのが札幌市である（7人、29%）。そして、かなり頻度高く訪れる旭川市・北見市が挙がる（5人、2%）。紋別市はない（0人、0%）。これは地元にある二つの高校（興部高校、紋別高校）を卒業して就職する場合に、まれなことではない居住地（候補）として意識されてないと考えられる。そして興部町が3人（13%）である。「道外」と「その他道内」は少ない。

他方で「遊びたいまち」という質問は、調査票の質問としては多義的な意味で中学生に受け取られたかもしれない。現在遊びに行くなら、という意味で答えた中学生も多いと思われる。そのため、現住所興部町を前提に、「遊ぶならこのまち」という意味での回答となっている。「札幌市」が断然多く（約半数）、次いで「旭川市・北見市」が支持されている。これは、前述した中学生の訪問地の現状をより札幌市側に強くしたものとなっている。

（3）中学生の進路と職業希望

進路希望を進学と就職、将来の職業希望について質問したものを整理したのが、次頁の図表 1-30 である。

進路希望において、「N.A.」、「未定」、「考えていない」が4人あった（17%）。それ以外は「進学」で「就職」に記述のあった中学生はいなかった。

進学では、高校等の具体的な名称が記述されていないものもあった。さらに異なる校種（高校と高専）や、異なる高校（興部高校、紋別高校）が重複して記述されているものもあった。図表では、高校名の無いものを上段に、具体的な学校名称が挙がっているものについては、より遠距離のものを下段においてある。

高校名の記述があったものでは、興部高校が最多（7人、29%）で紋別高校がそれに次ぐ（3人、13%）。

将来の職業希望では、具体的な記述がある中学生は14人であった（58%）。「N.A.」が1人、「決まっていない」「未定」が6人、「特になし」「考えてない」が3人いた。理由は職業希望を挙げている場合は、それに応じた理由が記述されていた。また、「決まっていない」「未定」ではその理由を記述した中学生もいた。

図表 1-30 将来志向（進路、職業希望、理由、高校以降の進路推定）

進路	将来の職業希望	理由	高校以降の進路(推定)	
N.A.	N.A.	N.A.	未定	
	決まってない	N.A.	未定	
未定	体育教師	体育をおしえる立場になりたい。	大学	
考えていない	ネット関連やゲーム系	ネットやゲームが好きだから。	専門学校	
進学	高校	未定	N.A.	未定
		スポーツ関連	N.A.	専門学校
		声優	声を使った仕事をしたいから。	専門学校
		きまってない	これから見つけていく。	未定
		水産庁	周りに勧められたから。	短大・大学
	高専、公立高校	建築士	デザインなどをしたいから。	大学
	興部高校	未定	N.A.	未定
		美容師	美容の学校に行って興味で止まっていたものが本当にやりたい仕事になった。	専門学校
		特になし	N.A.	未定
		美容師	あこがれているから。	専門学校
		声優	小学校の時からすごいと思っていた。	各種学校
		救命救急士	人の命を救いたい。	養成学校
	興部高校か紋別高校	考えてない	N.A.	未定
		カウンセラー	趣味だから。	大学
	紋別高校	決まっていない	決まらないから、よくわからないから。	未定
		未定	N.A.	未定
		イラストレーター	絵を描くことが好きなので、好きなことを仕事にしたいから。	専門学校
	名寄高校	今は特になし	酪農も少しきついし何か事務的なこともしてみたいから。	未定
旭川東	英語教師	今までいい先生に出会って助けられてきたから。	大学	
旭川高専	電車運転士	乗り物が好きで自分で運転できたらという思いから。	高専	

職業希望で複数の中学生が挙げているのは、「美容師」(2人)、「声優」(2人)、「教師」(2人)であった。それ以外は、資格関連職業や省庁を挙げているものが多い(「水産庁」、「建築士」、「救急救命士」。「美容師」や「教師」も資格関連職業である。「電車運転士」もそうかもしれない)。いわゆるカタカナ職業は、「ネット関連やゲーム系」、「スポーツ関連」、「カウンセラー」、「イラストレーター」である。

この進路と職業希望を参照し、さらに職業希望が高校卒業以降の進学が必須にする場合は、それを推理して、専門学校進学、短大や養成学校、四年制大学)についても考えてみた。「N.A.」、「未定」、「考えていない」については記述をそのまま活かしてあるが、職業希望を記述したものについての進路はあくまでも推理である。これも以降の分析で利用する。

(4) 中学生の将来生活志向

中学生に将来の生活についての志向(考え方)について質問する無理はあるのは承知しているが、どの程度具体的なものなのか、またどのような質かについて検討する。

まず、高校以降進路希望によって整理した自由回答で記述してもらったものを示す。そ

れが図表 1-31 である。

図表 1-31 高校以降進路希望（推察を含む）と将来生活価値

高校以降進路希望	内容
大学	それなりに不自由のない生活をしたい。
	のんびり、気の向くままに。
	自由な生活。
	食べて、寝られたいじょうぶです。
	裕福ではなくても幸せだと思える生活。
短大(同レベルの学校)	一人で暮らす。
	家を建てて普通の生活がしたい。
専門学校	お金に困らず、快適な生活。
	お金をいっぱい持っていなくても、普通に暮らせたらいい。
	安定。
	一人ではなく、誰かがそばにいる生活。
	仕事や家事、すべて安定している生活。
	仕事をしながらゆっくりした生活。
	自分の好きなことができるようになりたい。あかるくしあわせな家庭を作る。
	安全に、暮らす。
未定	一人暮らししていても自分の趣味に少しぐらい金だせるぐらいの金がもらえる生活。
	楽しい生活。
	楽しくて幸せな感じの。
	休み多めで自分がしたいことができる生活。
	自由気ままに。
	特になし。
	普通の生活。
	豊かで、穏やかな生活。
	未定。

進路希望が大学の中学生では、「自由」がキーワードになっているようだ。短大の中学生は、生活の形を意識している答えであるかもしれない。専門学校では、「安定」、「経済的に不自由がない」、「普通」あたりであろうか。未定の中学生は、「特になし」「未定」もあるが、様々な生活の価値（「安全」、「楽しい」、「幸せ」、「普通」、「穏やか」）の万華鏡である。

これだと雲をつかむような結果なので、この自由記述の要素的価値に注目し、再整理しまとめたものが次頁の図表 1-32 である。

ラベルは自由記述における要素的価値を、共通性の観点からまとめたものである。「自由の充足」、「安全・安定等」、「普通等」、「貧困ではない収入」、「仕事がある」、「幸福」、「楽しい・明るい」、「ゆっくり等」、「快適」、「持ち家を建てる」、「独り暮らし」、「共同の暮らし」、そして「なし・未定」である。

最も多いのが「自由の充足」である（6件、25%）。「自由の充足」というのは耳慣れない言葉になっているが、「自由」「気まま」「気の向くまま」「したいことができる」「好きなことができる」「不自由がない」を総和して、このように強引に名前を付けとなった。多く挙げられたものを挙げると、「安全・安定等」（4件、17%）、「普通等」（4件、17%）、「貧困

ではない収入」(3件、13%)、「幸福」(3件、13%)、「楽しい・明るい」(3件、13%) といったところである。

図表 1-32 将来生活志向の分類 (母数は 24 人)

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
自由な生活	自由の充足	6	25
	安全・安定等	4	17
波乱の無い生活	普通等	4	17
	貧困ではない収入	3	13
	仕事がある	1	4
苦悩の無い生活	幸福	3	13
	楽しい・明るい	3	13
スローな生活	ゆっくり等	2	8
	休みが多い	1	4
リッチな生活	豊か	1	4
	快適	1	4
	持ち家を建てる	1	4
独り暮らし		1	4
共同の暮らし		1	4
なし・未定		2	8
合計		34	142

これらをさらに質に注目し、生活の価値としてまとめてカテゴリを考えてみた。「自由な生活」(6件、25%)、「波乱の無い生活」(12件、50%)、「苦悩の無い生活」(6件、25%)、「スローな生活」(3件、13%)、「リッチな生活」(3件、13%)である。このようにまとめることが可能なら、中学生にとっての将来生活志向の中核は、「波乱の無い生活」である。これに、「自由な生活」と「苦悩の無い生活」が付け加わる。

旧来的な将来生活の価値であった「社会的な成功を収める」や「社会に貢献する」、「故郷に錦を飾る」等はない。社会が意識されていない。自分の(心地よい)在り方が、より正確には、心地よいというよりも、もっと控えめな「人並み以下は遠慮したい」というものであると考えられる。

ここで作成してきたカテゴリは、第二章の分析でも使用される。

第2章 考察

第1節 はじめに（浅川）

（1）考察の補助線（仮説）

私たちは、中学生の考え方の特徴だけではなく、背景にあるものを探りたいと考えている。背景にあるものを探ると言っても、個々の中学生の事情という意味ではない。それを越えたもっと強い理由をイメージしている。そして背景にあるものとは言っても、心理的なそれではなく、地域社会的で、「2010年代の今」という意味で）歴史的な背景について、である。そのため、第3節以降では、およそ二つの仮説に拠って、中学生たちを幾つかの集団としてまとめ、それを比較することによって確かめるという方法をとる。仮説とは、以下の二つである。

第一に、中学生の生活を基礎づけるものやことが重要である、という仮説である。

代表的なものとしては、中学生の家族状況のことが考えられる。そしてこれはさらに幾つかのことを考慮する必要があると考えている。例えば、家族構成（三世代家族か核家族か、家計の支え手はひとりかふたりか、さらに兄弟はたくさんいるか一人っ子か等）や保護者の就業状況（どのような職種か、安定しているかどうか等）である。これらのことは、中学生の生活の外枠を形作る。そして、これはその家族の個別の状況を越えて、現在日本社会において経済格差や地域格差の拡大が懸念されているが、そのことが興部町でどのように現れているのか、そして生活背景を通じて、中学生の生活の変化につながっているのかを考えるために必要となってくる。例えば、興部町において中学生の生活は安定しているのか、不安定になっているのか、それは産業の盛衰を通じたどのような回路を辿って現れたものなのか、ということを考えるということである。言い換えれば、現時の地域社会において中学生の問題を考えるということである。

第二に、中学生の時間パースペクティブを構成するもの・ことが重要である、という仮説である。時間軸という言葉は、次のようなことをイメージしている。ここで分析の対象としている中学生は3年生である。当然、進路問題が中学生の大きな関心事である。そして中学生が進路を考えると、単なる高校選択の問題として考えるわけではない。それは、二つの時間の狭間にあると複合的な判断であると考えられる。一方には、これまでの（過去）の未来への志向性をどのように培ったか、また未来を可能にするための条件としての学力（成績や点数にのみ還元されるものではない勉強の習慣や動機付けや意欲）を形成してきたのか、がある。またもう一方には、これから（未来）にどのような生活（職業選択も含めた）をして行こうかという志向性（夢やそれを現実化するための社会関係や展望）がある。またこの複合的な判断は、現在の生活（例えば、学習の必要性やモチベーション）にフィードバックされる。中学生の現在は、過去と未来を貫く時間的パースペクティブという奥行きをもっている。

この仮説を梃子にして、中学生の意識の背景を解釈してみる。十分な解釈が可能になるものもあるだろうが、当然、はみ出すものもある。この後者にこそ、中学生に固有の考え方（大げさに言えば思想性）が現れると同時に、学校の教科教育やキャリア教育における先生方の働きかけや、友人同士での影響の与え合い、そして地域社会や文化の影響力が把握できると考えている。

そしてこの二つの作業仮説を分析作業として具体化する際に、二つの要素を取り出して、それを組み合わせることによって、中学生を三つのグループにまとめ、それらを比較する。そしてグループ間の差異を知ることによって、三つのグループの類型化が可能かどうかを判断する。報告書の課題（中学生の将来志向と地域アイデンティティ）は、この類型によって理論化に迫りたい。

中学生の生活を基礎づけるものとして取り上げる二つの要素は、保護者の就業状況の指標として「職業」と時間的パースペクティブの要の位置にある中学生の学習の動機付けと意欲（これをひとつにまとめて「モチベーション」として扱う）である。

ひとつ目の要素は、保護者の職業は、地域産業との関連から二つに区別した。ひとつは地域の産業や行政等と固く結びついた職業である。もうひとつはそうではないものである。地域との関係の強さ（「根付き」）を重視したことからこの区別を採用した。保護者の職業は、一般的な意味で、家族生活において有形無形の影響力を中学生にもつであろう。また、家族総員での興部町から離脱の可能性や、中学生の高校以降の里帰りの場所がどこになるかということも含めて、長期的に様々な形で中学生への影響をもつと考えられる。

二つ目は中学生の学習へのモチベーションである。これを重視するのは、主に未来に向けての進路課題と対応している。比較的大きな都市で中学生の進路を考える場合、中学生は今の成績から飛躍の余りない成績に見合った高校等への進路を選択できる。それは高校数が多く序列化も進んでいるため、成績の近いレベルの中学生を受け入れることができる。これが通学可能圏に高校が少ない場合には、公立中学校のように中学生の成績は大きな幅をもつ。また、比較的大きな都市の場合、家族の経済的な余力の有無に依るけれども、容易に教育産業（塾等）による学力の底上げが可能となる。そのため、中学生自身の学習意欲が乏しくても学力的に底上げされ、「なんとなく」（流れに乗って）進学することも可能であるし、これが常態である。その点から言うと、旧網走第四学区に所属する興部中学校の場合、自宅通学の場合、大学進学を目指すなら北海道紋別高等学校普通科へ進学することで普通である。そして、仮に紋別高校普通科に入学しても、「大学であればどこでも良い」ということでない進学を考えるなら、大きな努力が必要になる。

※ 現在の大学入試において高校における受験指導だけでは足りないとする考え方は、珍しいものではない。ベネッセ教育総合研究所「第2回 放課後の生活時間調査 報告書 [2013]」によると、高校生の通塾率は学年平均で 23.7%である。四人にひとり塾に通う。高校3年生もなると、31.4%と三人にひとり迫る。高校だけに任せきりで受験を考える時代は終わっている。予備校側にとっても、「少子化」と大学の「ボーダー・フリー化」は、生き残りのために教育市場を予備校生から高校現役生にすることを必至にし

た。高校生の「予備校生」化である。高校生は、学校と塾の両方で勉強する。自学自習で大学入試を突破するという考え方は古くなった。また高校生側から考えると、自発的に勉強できない、強制力が必要だということもあるだろう。すなわち、大学進学は、(進路実績の)良い高校に送り込めば何とかできるのではなく、高校入学後も(進路実績の)良い塾に通わせ、勉強を続けさせなければならない時代になっている。当然、保護者の教育費の捻出を可能とする経済力も、より長期に渡って求められる。卑近な例で恐縮だが、札幌圏の道立の東西南北の四つの高校に続く準進学校においては7割を超える高校生が通塾しているというデータもある。この事態は、塾資源が札幌圏に集中していることも相まって、大学進学の地域格差を助長している。

例えば、2015年の興部町の中学からの(興部中学校と沙留中学校)の進学先を検討してみるとそのことが分かる。図表2-1-1はそれを示したものだ。

図表2-1-1 2015年の興部町中学生の進学先高校

高校所在場所		高校名	生徒数(人)	内訳(%)	
興部町中学校卒業生	オホーツク西学区	紋別高校	17	40.5	
		滝上高校	0	0.0	
		興部高校	18	42.9	
		雄武高校	1	2.4	
		小計	36	85.7	
		旧網走3学区	遠軽高校	0	0.0
			湧別高校	0	0.0
			小計	0	0.0
		計		36	85.7
		オホーツク中学区		1	2.4
	オホーツク東学区		0	0.0	
	オホーツク学区以外の道内	公立	1	2.4	
		私立	3	7.1	
		高専	1	2.4	
小計		5	11.9		
道外		0	0.0		
合計		42	100.0		

紋別高校以外では、オホーツク中学区(北見)、オホーツク学区外(このなかにはスポーツ進学も含まれる)への進学が不可避となる。保護者の経済力に裏打ちされた進路期待と中学生自身の強い意志が進学と準備過程に求められてしまう。

このような状況があるため、高校進学前から、大学進学や将来の職業選択までを見通して(不確かさや中学生ならではの甘さの問題はある)、中学生自身が自覚を持って学習に挑むのかどうかは、決定的に重要となってくる。地域格差の拡大する北海道において、地方出身の中学生が大学進学で不利になる度合いは、教育産業が市場を拡大する程度に応じて高まっている。

そして、この二つの要因は内的な関係ももっている。地方において中学生の学習へのモ

モチベーションは、親の進路期待の影響を露骨に受けるからである。より正確な言い方をすれば、「なんとなく」の進学が不可能な地方において、親の進路期待が中学生の学習へのモチベーションの大きな支えとならざるを得ないからである。

以下、第3節以降の分析において、この二つの要素を用いて中学生を仮説的に三つのグループに整理し、その比較を行う中で類型として整理できる部分と、それを越える部分について明らかにしていきたい。

(2) 中学生をグループで区別する

①保護者の職業区分

第1章(図表1-1、7頁)で示したように、保護者の職業を職業名とその内容から、四つに区別した。

第一に、「一次産業自営」である。これには酪農家と漁家が該当する。中学生数は6人である。第二に、「第一次産業周辺職業」である。酪農に関わる様々な職業をこれに位置づけた。中学生数は4人である。このように中学生の保護者は、興部町の主要産業と固く結びついている。第三に、「地場的その他職業」である。これは興部町やもう少し広い範囲での地域性ももつ、しかし第一次産業に直接関わらないと思われる職業の、全てを位置づけた。中学生数は7人である。そして最後に、「非地場的その他職業」である。ここには転勤に関わる職業や地域移動が比較的可能な職業を位置づけた。そのような意味で、「非地場」という名称を用いた。「地場」という言葉は、土地(地域性)と結びついている第一次産業やその周辺産業と、それとは異なるが役場職員等の転勤を考えにくいことをイメージするためのものであった。中学生数は7人である。最後に「非地場」は、それと異なることを表現しようとした。中学生数は7人である。

②中学生の学習への動機付け(モチベーション)による区分

さらに中学生を勉強へのモチベーションの観点からグループに区分する。これは、家庭学習の習慣形成という観点から、週あたりの日常的な(宿題やテスト前を除いたもの)日数を聞いたものである。これと学校生活の中心を聞いた設問をクロスした表を、次頁に掲げておく(図表1-8の再掲、14頁)。

図表から読み取れるように、学校生活において「友人関係」に中心を置く中学生を間にはさんで、「勉強」に中心に置く中学生の家庭学習日数が広くばらつき、「部活」に中心を置く中学生の家庭学習日数が短い方に分布していることがわかる。すなわち、学校生活の型と週あたり家庭学習の日数は緩やかな対応関係にある。このうち「毎日」と「4・5日」を「学習習慣あり」層としてとらえ、「0~3日」までを「学習習慣なし」層としてとらえて、この二つを区別する。

図表 2-1-2 「学校生活の中心に置いていること」×「週あたり家庭学習の日数」

		週あたり家庭学習の日数					合計
		毎日	4~5日	2~3日	1日	0日	
勉強中心型	度数(人)	4	0	0	1	0	5
	内訳(%)	80	0	0	20	0	100
友人関係中心型	度数(人)	5	2	3	2	2	14
	内訳(%)	36	14	21	14	14	100
部活中心型	度数(人)	1	0	1	3	0	5
	内訳(%)	20	0	20	60	0	100
合計	度数(人)	10	2	4	6	2	24
	内訳(%)	42	8	17	25	8	100

保護者の職業類型（四区分）と中学生の学習習慣（二区分）という二つの指標をクロスして作成したのが図表 2-1-3 である。

図表 2-1-3 中学生の学習習慣の有無と保護者の職業分類

		保護者の職業の分類				合計
		一次産業自営	第一次産業周辺職業	地場的その他職業	非地場的その他職業	
学習習慣あり	度数(人)	3	2	3	4	12
	内訳(%)	25	17	25	33	100
学習習慣なし	度数(人)	3	2	4	3	12
	内訳(%)	25	17	33	25	100
合計	度数(人)	6	4	7	7	24
	内訳(%)	25	17	29	29	100

これを見て分かるように保護者の職業を通しての地域との結びつき（「地場的」であるかどうか）は、学習習慣には直接的に影響しない。また、同様に非地場的職業においてもそれは影響しない。第1章で記述したように、学習習慣には学校生活類型や進路との関わりが強かった。しかし、親の職業は中学生の進路には実は影響している。だとすれば、職業という媒介を経由して、地域への「根付き」の強弱が中学生の将来的な地域移動展望に当たえる影響の可能性は検討の対象となる。その点を重視して、「第一次産業自営」、「第一次産業周辺職業」、「地場的その他職業」をひとまとめとする。そして「学習習慣あり」を、前述したような理由から勉強のモチベーションがあると理解し、それがイメージできるような言葉として「向学」を付す。

このような理由から、「地場的職業・学習習慣あり」層と「地場的職業・学習習慣なし」層、そして「非地場的職業・学習習慣ありとなしの両方」を区別し、それぞれ「地場・向学」、「地場・非向学」、「非地場」と命名する。「非地場的その他職業」の保護者の中学生数が少ない（7人）ため、分析が不鮮明になるところをまとめることで理解しようとした試みであるとも言える。

以下の第3節・第4節の分析では、この三つの区別が中学生の進路や地域アイデンティティを考察する上で活用されて行く。

第2節 地域アイデンティティはどのような構造なのか（浅川）

（1）はじめに

ここでの課題は、第1章で行った調査の概要において行った中学生の地域アイデンティティの素描（都市と「鄙びた場所」の対比構造の後に興部町を当てはめるステレオタイプの見方。地域社会とそれが自治体と住民の努力で成り立っているところには目が届いていないこと）をアイデンティティの内部構造を明らかにすることである。

方法は、自由記述から作成したカテゴリ間の関係を検討することである。しかしながら、中学生の人数（24人）から、作成されたカテゴリ（ラベルを代用することもある）に該当する人数が少ないものもある。人数の少ないカテゴリの分析は、確実性に限界がある。そのため代表的なカテゴリに限定し、カテゴリ間の関係を検討する。

（2）興部町の「良いところ」カテゴリ間の関係はどうなっているか

図表1-18（24頁）で作成された「自然のめぐみ」と「生活が穏やか」の関係はどうなっているのだろうか。

図表2-2-1 「生活が穏やか」×「自然のめぐみ」

			「自然のめぐみ」		合計
			該当	非該当	
「生活 が穏 やか」	該当	度数(人)	8	6	14
		内訳(%)	57	43	100
	非該当	度数(人)	8	2	10
		内訳(%)	80	20	100
合計		度数(人)	16	8	24
		内訳(%)	67	33	100

このクロス集計を「生活が穏やか」に注目して説明しよう。「生活が穏やか」という印象をもつ（該当）中学生に比べて、印象をもたない（非該当）中学生は「自然のめぐみ」という印象をもちがちであるということが分かる。すなわち、この「良いところ」を構成する両者は調和的な関係では余りない。興部町の別の「良いところ」を捉えていることが分かる。興部町での生活に踏み込んだ印象（「生活が穏やか」）をもたない場合には、「自然のめぐみ」という印象が強化されるからである。言い方を変えれば、生活が深まることによって、外見的な印象（「自然のめぐみ」）が和らぐ形になっているとも言える。

（3）興部町の「良くないところ」カテゴリ間の関係はどうなっているか

図表1-19（26頁）で作成された「都市にあるはずのものが無い」と「ワクワク感がない」との関係はどうなっているのだろうか。しかし、「ワクワク感がない」という印象をもった中学生が少ない（8人）ために、意味は限定的である。

図表 2-2-2 「ワクワク」感がない × 「都市にあるものがない」

			「都市にあるものがない」		合計
			該当	非該当	
「ワクワク」感がない	該当	度数(人)	4	4	8
		内訳(%)	50	50	100
	非該当	度数(人)	10	6	16
		内訳(%)	63	38	100
合計		度数(人)	14	10	24
		内訳(%)	58	42	100

このクロス集計を「ワクワク」感がない」に注目して説明しよう。「ワクワク」感がない」という印象をもつ中学生は、もたない中学生に比べて「都市にあるものがない」という印象が弱まるということである。すごく微妙な違いとなっているが、「都市にあるものがない」がどちらかというとな実的な側面（店があるか、ないか）を多く含むのに比べて、「ワクワク」感がない」は抽象度が高いということと、カテゴリ自体の適切性の問題や、中学生にとって「ワクワク」感がない」ということがどこまで切実かによっている面もあるだろう。両者が同じように都市を意識しているにしても、若干違う側面を意識していることが言えそうだ、という程度である。

(4) 興部町の「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ間の関係はどうなっているか

① 「自然のめぐみ」があるという印象は「良くないところ」とどのように関わっているか

まず、興部町の「良いところ」を抽象化したカテゴリ「自然のめぐみ」が「良くないところ」の二つのカテゴリとどのような関係にあるのかを考える。

図表 2-2-3 「自然のめぐみ」 × 「都市にあるものがない」

			「都市にあるものがない」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	12	4	16
		内訳(%)	75	25	100
	非該当	度数(人)	2	6	8
		内訳(%)	25	75	100
合計		度数(人)	14	10	24
		内訳(%)	58	42	100

一見して強い関係があることが分かる。興部町の「良いところ」で「自然のめぐみ」の

印象をもつ（該当）中学生は、「良くないところ」で「都市にあるものがない」を強く意識（該当）している。すなわち、この二つはひと組の関係にある。29 頁で「ステレオタイプ（紋切り型）」として、都市と「鄙びた場所」の対比的枠組みで、「都市にあるもの」「ワクワク」感と「自然のめぐみ」「生活が穏やか」が対比的に構造化され、その後に興部町が位置づけられているという考え方は、少なくとも「都市にあるものがない」と「自然のめぐみ」がひと組であったことでデータの裏づけられる。

同様に、「自然のめぐみ」と「ワクワク」感がない」の関係はどうだろうか。

図表 2-2-4 「自然のめぐみ」×「ワクワク」感がない

			「ワクワク」感がない		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	5	11	16
		内訳(%)	31	69	100
	非該当	度数(人)	3	5	8
		内訳(%)	38	63	100
合計		度数(人)	8	16	24
		内訳(%)	33	67	100

これは「都市にあるものがない」とは全く違い、関係がない。「自然のめぐみ」が「都市にあるものがない」と同じく抽象度が低く、実態に近いものであることも関わっている可能性がある。

さらに、「生活が穏やか」に替えて、同じように検討する。

図表 2-2-5 「生活が穏やか」×「都市にあるものがない」

			「都市にあるものがない」		合計
			該当	非該当	
「生活 が穏 やか」	該当	度数(人)	6	8	14
		内訳(%)	43	57	100
	非該当	度数(人)	8	2	10
		内訳(%)	80	20	100
合計		度数(人)	14	10	24
		内訳(%)	58	42	100

これは大きな違いがあることが分かる。このクロス集計を「生活が穏やか」に注目して説明しよう。「生活が穏やか」という印象をもつ（該当）中学生は、そうでない（非該当）中学生に比べて「都市にあるものがない」という印象をあまりもたない。すなわち、都市への憧れを弱める関係にあるとすることができるだろう。

このように、同じ興部町の「良いところ」と言っても「良くないところ」との対比から

は、「自然のめぐみ」と「生活が穏やか」は全く違う側面の意識であることが分かった。その点からいって、「鄙びた場所」の良い面として区別したこの二つのカテゴリは緊張関係にあって、中学生の生活が地域社会に深入りしているのかどうかの違いを表しているものと考えられる。

図表 2-2-6 「生活が穏やか」×「ワクワク」感がない

		「ワクワク」感がない		合計	
		該当	非該当		
「生活 が穏や か」	該当	度数(人)	4	10	14
		内訳(%)	29	71	100
	非該当	度数(人)	4	6	10
		内訳(%)	40	60	100
合計		度数(人)	8	16	24
		内訳(%)	33	67	100

「生活が穏やか」という印象をもつ中学生は、もたない中学生に比べて「ワクワク」感がない」という印象をあまりもたない。しかし、これには大きな違いはない。

以上のことから、興部町の「良いところ」を表す二つのカテゴリは意味が異なり、都市への憧れに、片方は見事に重なり、もう片方はそうではない。このことは、地域アイデンティティを考える上で大きなヒントとなる。中学生がむやみに都市に憧れないようにするためには、興部町での生活に深入りしてもらう必要が、「生活が穏やか」に注目してもらう必要があることを示唆する。

(5) 興部町だからできることと「良いところ」カテゴリ・「良くないところ」カテゴリは関係があるか

①興部町だからできることと「良いところ」カテゴリは関係しているか

図表 1-21 (30 頁)において、興部町だからできることを幾つかのラベルとして抽象化した。このうちでまとまった人数があるものは、せいぜい「都市ではできないこと」ができるというものである。これだけを確認しておく。

まず「自然のめぐみ」との関係を見る。次頁の図表 2-2-7 がそれである。

一見して、強く関係していることが分かる。このクロス集計を、「都市ではできないこと」に注目して説明しよう。興部町だからできることとして「都市ではできないこと」を挙げる(該当)中学生は、そうではない(非該当)中学生に比べて、「自然のめぐみ」を強く意識している。ここでも都市との対比において、「自然のめぐみ」が意識されていることが確認できる。言い方を変えるなら、「都市ではできないこと」ができることとは、興部町だから「自然のめぐみ」を手に入れることができると同じ根っこをもった考え方である。

図表 2-2-7 「都市ではできないこと」×「自然のめぐみ」

			「自然のめぐみ」		合計
			該当	非該当	
「都市ではできないこと」	該当	度数(人)	6	1	7
		内訳(%)	86	14	100
	非該当	度数(人)	10	7	17
		内訳(%)	59	41	100
合計		度数(人)	16	8	24
		内訳(%)	67	0	1

次に「生活が穏やか」との関係を見る。図表 2-2-8 がそれである。

図表 2-2-8 「都市ではできないこと」×「生活が穏やか」

			「生活が穏やか」		合計
			該当	非該当	
「都市ではできないこと」	該当	度数(人)	4	3	7
		内訳(%)	57	43	100
	非該当	度数(人)	10	7	17
		内訳(%)	59	41	100
合計		度数(人)	14	10	24
		内訳(%)	58	42	100

興部町だからできることとして「都市ではできないこと」を挙げても、挙げなくても、「生活が穏やか」にはほとんど影響がない。「生活が穏やか」という意識の有無は、興部町だからできることとして「都市ではできないこと」を上げるかどうかに影響されない。

②興部町だからできることと「良くないところ」カテゴリは関係しているか

全く同様に、興部町の「良くないところ」カテゴリとの関係を見て行く。まず、「都市ではできないこと」である。図表 2-2-9 である。

図表 2-2-9 「都市ではできないこと」×「都市にあるものがない」

			「都市にあるものがない」		合計
			該当	非該当	
「都市ではできないこと」	該当	度数(人)	6	1	7
		内訳(%)	86	14	100
	非該当	度数(人)	8	9	17
		内訳(%)	47	53	100
合計		度数(人)	14	10	24
		内訳(%)	58	42	100

一見して関係があることがわかる。このクロス集計を、「都市ではできないこと」に注目

して説明しよう。興部町だからできることとして「都市ではできないこと」を挙げる（該当）中学生は、そうではない（非該当）中学生に比べて、「都市にあるものがない」を強く意識している。すなわち、興部町だからできることとして「都市ではできないこと」ができるという考え方は、興部町には「都市にあるものがない」という考え方の同じである。「都市ではできないこと」ができるというカテゴリの要素にあった「田舎っぽいことをする」も、それを裏づけているように思う。素直な意味で「都市ではできないこと」ができることを肯定しているわけではない。そのため、ことさら「都市ではできないこと」ができると思わない中学生の場合、「都市にあるものがない」と意識するかどうかは半々となる。

同様の操作で、「都市ではできないこと」×「ワクワク」感がない」のクロス集計もやってみた。緩やかな関係がありそうだが、特徴的だと思われる点が共に非該当の領域であるため、解釈をもつことができなかった。

（6）興部町だからできないことと「良いところ」カテゴリ・「良くないところ」カテゴリは関係があるか

興部町だからできないことラベルは「都市的遊び」に集中する（図表1-22、31頁）。これと興部町の「良いところ」と「良くないところ」のクロス集計を行った。しかし、強い関係があるものが少なかった。解釈のし易さという観点から、「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリを表側とした図表を作成した。

①興部町だからできないことは「良いところ」カテゴリと関係があるか

まず、「自然のめぐみ」とのクロス集計を行ったが、全く関係がなかった。そこで、「生活が穏やか」とのクロス集計した図表2-2-10を掲げておく。

図表2-2-10 「生活が穏やか」×「都市的遊び」ができない

			「都市的遊び」		合計
			該当	非該当	
「生活 が穏 やか」	該当	度数(人)	6	8	14
		内訳(%)	43	57	100
	非該当	度数(人)	6	4	10
		内訳(%)	60	40	100
合計		度数(人)	12	12	24
		内訳(%)	50	50	100

あまり強い関係があるとは言えない。しかし、興部町の良いところとして「生活が穏やか」を挙げる（該当）中学生は、挙げない（非該当）中学生に比べて「都市的遊び」ができないことをあまり意識しない。「自然のめぐみ」とやはり対照的な関係にある。

②興部町だからできないことは「良くないところ」カテゴリと関係があるか

まず、興部町の「良くないところ」で「都市にあるものがない」を意識することと興部町にいるからこそできないことで「都市的遊び」を意識することは関係しているのかを検討する図表2-2-11である。

このクロス集計を、「都市にあるものがない」に注目して説明しよう。興部町の良くないところとして「都市にあるものがない」を挙げる（該当）中学生は、そうではない（非該当）中学生に比べて、「都市的遊び」ができないことを少し強く意識している。すなわち、「都市にあるものがない」という意識は、「都市的遊び」ができないという意識につながっている。しかしながら、それほど大きな差ではなかった。すなわち、重なり切ってはいない。「都市にあるものがない」というカテゴリは「都市的遊び」というラベルとずれを含んでいる。しかしそれ深める手だてがない。

図表2-2-11 「都市にあるものがない」×「都市的遊び」ができない

			「都市的遊び」		合計
			該当	非該当	
「都市にあるものがない」	該当	度数(人)	8	6	14
		内訳(%)	57	43	100
	非該当	度数(人)	4	6	10
		内訳(%)	40	60	100
合計		度数(人)	12	12	24
		内訳(%)	50	50	100

次に、興部町の「良くないところ」で「ワクワク」感がないを意識することと興部町にいるからこそできないことで「都市的遊び」を意識することが関係しているのかを検討する。図表2-2-12である。

図表2-2-12 「ワクワク」感がない×「都市的遊び」ができない

			「都市的遊び」		合計
			該当	非該当	
「ワクワク」感がない	該当	度数(人)	5	3	8
		内訳(%)	63	38	100
	非該当	度数(人)	7	9	16
		内訳(%)	44	56	100
合計		度数(人)	12	12	24
		内訳(%)	50	50	100

このクロス集計を、「ワクワク」感がない」に注目して説明しよう。興部町の良くないところとして「ワクワク」感がない」を挙げる（該当）中学生は、そうではない（非該当）中学生に比べて、「都市的遊び」ができないことを少し強く意識している。「都市にあるものがない」よりも該当の内訳が多い点が興味深い。「都市にあるものがない」という店やシ

ショッピングを含んでいたカテゴリよりも、より純粋な「ワクワク」感として「遊び」を意識しているためではないかと推察されるが、それほど大きな差ではない。

(7) まとめ

まず、興部町の良いところの二つのカテゴリは違うものを示唆していた。興部町の良くないところの二つのカテゴリは微妙な違いをもっているが特定できなかった。

興部町の良いところカテゴリのうち、「自然のめぐみ」は、興部町の良くないところカテゴリのうち「都市にあるものがない」と強い対応関係にあった。すなわち、両者は共存する意識であると言える。

興部町の良いところカテゴリのうち、「生活が穏やか」は興部町の良くないところカテゴリのうち「都市にあるものがない」と食い違っていた。「生活が穏やか」であると考えてる中学生は、「都市にあるものがない」という切迫した意識を大分免れることができた。

興部町にいるからこそできることラベルのうち「都市ではできないこと」ができるは、興部町の良いところカテゴリの「自然のめぐみ」と強い対応関係にあった。両者は同根のものである。都市との対比枠組みのなかで、興部町の「自然のめぐみ」と興部町で「都市ではできないこと」ができるは、ベクトルを共有することができた。「都市ではできないこと」ができるの内容が豊富になれば、「自然のめぐみ」と重ならない部分を持てるはずであるが、それは無かった。

興部町にいるからこそできることラベルのうち「都市ではできないこと」ができるは、興部町の良いところカテゴリの「生活が穏やか」と関係がなかった。

これからのことから、興部町の良いところカテゴリの「生活が穏やか」はステレオタイプ（紋切り型）に納まらない。中学生が実感できている生活経験の深さの賜物である。そして、事例数が少ないため確認ではなかったが、興部町にいるからこそできることの中にも同種類のものがあると考えられる。例えば、「楽しい行事への参加」ラベルや「地域の人とふれあう」ラベルがそれに当たると考える。すなわち、都市と「鄙びた場所」の対比の構図からはみ出してゆく生活体験の深まりや地域社会へのコミットメントは、この構図の都市体験（ショッピングや遊び）に劣らない意味を中学生が感じる可能性を与える。

第3節 興部中学校3年生の地域アイデンティティと定住志向について(学生担当分割愛)

第4節 興部中学校3年生の地域アイデンティティは将来志向においてどのように影響があるか（学生担当分割愛）

おわりに——まとめと今後の課題（浅川）

2010年代の地方に生きる中学生の将来志向と地域アイデンティティの関係を様々な角度から分析をしてきた。詳細は各章・各節の記述に譲るが、まだまだ考察が十分とは言えないところが多々残っている。

第一の課題は、「地域アイデンティティ」と言う場合の「地域」をローカル・コミュニティと捉え、「ローカルであること」と「コミュニティであること」の二つが中学生のアイデンティティにどのように関わるのかを明らかにすることであった。

そしてそれは、「興部町への思い」や興部町の「良いところ」と「良くないところ」の構造とその矛盾、そして興部町だから「できること」と「できないこと」の構造とその矛盾として捉えられ、それを明らかにする方法をとった。

見えてきたのは、ステレオタイプ（紋切り型）の都市と「鄙びた場所」という対比の枠組みに大きく影響された中学生の意識であった。この後者に興部町を当てはめて、見てみると考えられる。中学生は、興部町の「自然のめぐみ」（カテゴリ）を大きく意識し、同時に興部町の良くないところとして「都市にあるものがない」（カテゴリ）を意識していた。すなわち、興部町の自然・食・産業への評価は非常に高いものの、それは「都市にあるものがない」という意味であって、興部町に欠けるものを補完することはなかった。

しかしながら、慌てて付け加えるが、中学生の「都市にあるものがない」というイメージは貧困である。ショッピングやカラオケ・ゲーム等の広義の「消費」に偏ったきらびやかさがそれを形づくっていた。

ところで、興部町にはもうひとつの「良いところ」カテゴリがあった。それは「生活が穏やか」である。「都市にあるものがない」というカテゴリが消費に、そして表面を意味するものであるとしたら、「生活が穏やか」は生活体験やその深さを意味するものである。興部町の良いところは、「自然のめぐみ」と「生活が穏やか」の両者が緊張感を抱え、混在していると言える。

さらに、興部町だから「できること」と「できないこと」の検討に進んだが、中学生のイメージは分散していて、「生活が穏やか」に対応した形でそれに結実してはいない。少しそれに関わるものとして、中学生の行事への参加（お客様としてではない）や、学校や核家族内にとどまらない社会関係にその芽を見取することはできるかもしれないが、非常に限定的である。

砂漠のような大都市とは異なる地方小都市だから、コミュニティの实在の程度は比べ物にならないはずである。しかし、地方小都市であっても、中学生がコミュニティにどのようにコミットメント（関与）をするかは、未だ課題がたくさんあるのかもしれない。

さらに、将来志向と地域アイデンティティは強く関わっていた。直接的な進路（高校やその後の大学）は、学習への動機付け（モチベーション）や保護者の進路を可能にする経済的な状況に影響される部分もあった。しかし、中展望の興部町から出るのか／出ないの

か、戻ってくるのか／戻ってこないのかに、地域アイデンティティは、強く影響していた。

ただし、この分析で分かる関係性の強さは因果関係について立証できない。例えば、興部町から出て戻ってこないと考え（てい）る中学生が、興部町には「都市にあるものがない」を強く意識していたとしても、二つの解釈が同時に成り立つ。「都市にあるものがない」から戻ってこないのだと、「都市にあるものがない」を原因として考えることもできる。同時に、興部町から出て戻ってこないことを展望しているが故に、「都市にあるものがない」ということを強く意識してしまう。分析はこのどちらを教えない。そして、事実として両方を含んでいると考えられる。

ところで、地方における「人口減少」に抗する（「地方創生」の）教育問題として考えるなら、地域アイデンティティの問題は、省みられてしかるべきものと言えるだろう。

報告書の分析から確たることが結論できるわけではないが、二つの点について指摘はできそう。

第一に、「地方創生」の教育版は、郷土の魅力を「自然」や「食」等に求めてはいけないということである。それは、例のステレオタイプ（紋切り型）の片方を強化するだけで、ステレオタイプ（紋切り型）そのものの変更を迫るものではないからだ。

両方の良いところも、言わば表層であって、観光客（消費者）が直接的に評価可能なレベルに過ぎないからである。「生活が穏やか」カテゴリが教えていたのは、ある程度長期の、馴染みになって、親しくなつてこそ、始めて理解できる良さが中学生に理解させていたし、より強められるべきものであるか。さらに、付け加えると、これは学校や家庭で提供できるものではなく、やはり地域社会の取り組み（なにもイベント的なものへお客様の参加するというわけではない）に関わって行くことを通じて培われて行くタイプのことである。多忙を極める中学校現場にとって申し訳ない提言となるが、地域学習の取り組みやキャリア教育も地域生活をひとつの軸として、発想を変える必要があるかもしれない。そしてこれが可能になるためには、興部町も含むオホーツク圏や近隣圏も含んだ範囲で、少なくとも都市－田舎という単純な対比を越えた生活の展望、産業の連関構造が中学生にとって関知できるような形で構想される必要があるだろう（酪農を事例としたものについては酪農関連労働市場とそこで技能形成ルートの整備の問題として、提案したことがある）。

さらに、「地方創生」の教育版と学習への動機付け（モチベーション）の関係についても多少付言する。大学の現場にいて感じることであるが、自ら学ぶ学生は非常に少なくなった。高校時代も含めて、やり方からモチベーションまで市場で調達して、コスパで考える。大学に進学した時点で、学習への動機付け（モチベーション）を使い切り、搾りかすとして大学に入学する。そして大学で暇つぶしをし、後は就職活動を待つばかりである。学習とは言っても、「やらせられ」、提示されたやり方から選択した経験しかもっていない学生が大半である。個人的な成功を越える学習への動機付け（モチベーション）はどこにもない。ところで都市と地方を比較した場合、潜在的には地方の方が個人的な成功を越える学習への動機付け（モチベーション）を持てる可能性がある。例えば札幌市では 200 万人の

人に過ぎないが、興部町では 4000 人のひとりである。そして中学生の活動は、「人口減少」が進む興部町を元気にする可能性をもつ。言い方を替えれば、「出番がある」し、「出番は多い」。「地方創生」は、学習への動機付け（モチベーション）を地域に求め、それを通じて「学ぶことを学ぶ」中学生を育てる場を拓いているとも理解することができる。

第二に、「都市に行けば何か解決できる」という中学生の淡い願望は、2010 年代という時代ではあまり意味がないということをごどのように教えるか・学ぶかというものである。

中学生には酷なのは承知している。しかし、現在、若年労働力の約半数は非正規雇用であり、都市で学歴を取得できれば安定雇用が獲得できるものでは、もはやない。さらに、都市の生活環境（余暇の充実も含めて）は過去ほど良いものではない。「お金次第」（よりその状況が強化されている）である都市の自由度は、ある意味で低い。社会関係を断ち切られた都市で、「お金もない」なら、絶望的である。中学生が「生活が穏やか」を価値として意識していたことには、そのことへの触知があるのではないだろうか。

例えば、一見開かれていると思われがちな都市でこそ、若者の孤立を知る機会は中学生にあるのだろうか。「淡い夢」がもたらすモチベーションは、今のままでは「毒」の意味になっていると考える。「都市に出れば問題は解決」、あるいは「都市に出れば地方のストレス解消」は、そう簡単ではないということがつかめても良いように思う。U ターン者がキャリア教育で、「郷土に錦を飾った」成功者でもない、「都市での戦い」の敗残者としてもない、両方の貴重な経験の中で、郷里を再び選び直したことに学ぶ必要はないのだろうか。

ところで、今後の課題は多い。中学生の地域理解のステレオタイプとそれに納まらないもの（本報告書では「生活が穏やか」）をより一般化された形で確認し、中等教育の改善の課題につなげたい。また、「地方創生」は教育の問題だけで解決できる問題ではないことも自明である。これらをつなぐことができるような理論枠組みの彫琢に進みたいと考える。

最後になりましたが、貴重な勉強の機会をくださいました興部中学校の石原校長先生、飛澤教頭先生、そして教職員の皆様。アンケートに協力くださった中学 3 年生の皆様に、心から感謝します。拙い報告書ですが、これからも精進し、より良いものとする事で、興部町を始め、北海道の中等教育の発展に貢献したいと考えています。

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の
社会的自立と中等教育の改善に関する研究」
研究報告書 1 「興部町中学校調査報告書 中学生の将来志向と地域アイデンティティ」

研究代表者 浅川和幸

連絡先 〒060-0811 札幌北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院
Tel・fax 011-706-2604

平成 29 年 3 月 29 日発行
印刷 北海道印刷企画株式会社
Tel 011-562-0075